

インフィニット・スト
ラトス～2度目人生で
宇宙へ～

とあるP

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少年時代宇宙へ行く事を夢見ていた神戸博（かんべ ひろし）は何故か神様の手違いによってこの世とお別れしてしまった。

自分の行いに罪悪感を覚えた神は博に転生する事を約束した。
転生した世界はインフィニット・ストラトス。

そこで、博が要求したのは

- ・ 大学時代の頭脳を持つこと
- ・ 目を灰色からオッドアイ（赤と灰色）にすること
- ・ 健康な身体であること

そして最後にこんな事を願った

「最後に、僕が生きている間に宇宙に連れて行くこと」

これは、2度目人生で宇宙へ行く事を夢見た男の物語…

初の転生話になります。設定はありますが多分色々追加されると思います。がそれでもいい方は暖かい目で見守ってくれば幸いです。

目次

	設定集	1
	第1章 IS学園入学とクラス代表決定戦	
	第1話 ようこそIS学園へ	7
	第2話 クラス代表決定戦〜前編〜	32
	第3話 クラス代表決定戦〜後編〜	60
	第2章 謎のISとクラス対抗戦	
92	第4話 クラス対抗戦〜前編〜	
	第5話 クラス対抗戦〜後編〜	119
	第3章 2人の転校生とタッグマッチ トーナメント	
	第6話 2人の女神	137
	第7話 ドイツからの転校生とシャル ルの秘密	152
	第8話 シャルル救出作戦	168

設定集

IS SS設定集

オリキャラ設定

名前：

転生前

神戸 博（かんべ ひろし）（26歳）

転生後

田島 晃（たじま あきら）（16歳）

性別：男

転生前

容姿 中肉中背 持病持ち 目が灰色 学生時代の成績は中の上

転生後

容姿 長身 病気無し 目がオッドアイ（赤と灰色） 成績は上の中

性格：幼い頃から宇宙に興味があり、大学では天文学者になる事を夢見ており、天文学を専攻していた。しかし、地元の中小企業に就職するも宇宙への情熱を捨てきれな

かった。健康を第一に生きてきたが、神様のいたずらにより突然死にあってしまふ。

転生後は、ISの世界に入り込み、2人目の男性操縦者として名が知れる。因みにISの知識はゼロに等しい…。礼儀がなっていない人にはとことん嫌悪感を抱く。女尊男卑を良しとしない。

家族構成：両親は20歳の時に交通事故で他界。一人暮らしで会社と自宅の往復をしていた。

転生後は家族に恵まれて、紫音と茜の3人で暮らしている。(なお父親はいなく

田島 紫音(たじま しおん) 晁の妹。天真爛漫でおてんば娘であり、いつも兄の晁の後を付いて行くお兄ちゃんっ子。

田島 茜(たじま あかね) 晁と紫音の母親。近所のスーパーで働き2人を育てている。数年前から夫と離婚している。

女神side

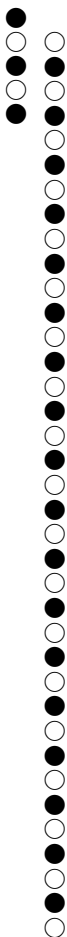
天宮 空(あまみや そら) (運命の神 ソフィア)

ISの世界に飛びこんだソフィア。銀髪碧眼で見目麗しい容姿をしているが、神としての仕事をおろそかにする厄介者。運悪く博を殺してしまったことに罪悪感を持っている。

その為、4つの転生得点を与える。そして、博をISの世界に赴いた博を厄災から守るべく自身もISの世界に向かうのであった。

四条 鏡花（しじょう きょうか）（美の女神 アフロディーテ）

ISの世界に飛びこんだアフロディーテ。金髪で全ての人々を虜にする容姿を持っている。ソフィアが間違つて殺してしまった人間（博）に興味を持ち、あの手この手を使って口説き落とそうしている。しかし、中々上手くいかず、いつも一夏達に邪魔される。



キヤラクター

織斑 一夏（専用IS：白式）

世界でISを使える男性操縦者。飄々としているが、自分が信じた物なら、絶対に貫く熱い一面も持つが、頭になると周りが見えな部分もある。恋愛に関しては、ドが付くほどの唐変木。しかし、鏡花の前ではいい格好をしようとしてヒロイン達から反感を買っている。

篠ノ之箒（専用IS：打鉄↓紅椿）

一夏の最初の幼馴染。長いポニーテールをしており、剣道が得意。全国大会で優勝する程のレベルを持っている。頑固な性格で一夏に想いを寄せているが、素直になれず想いを伝えられていない。

鳳 鈴（専用IS：甲龍）

中国の代表候補性。一夏のセカンド幼馴染。昔から一夏が好きだったが、箒同様素直になれず、いつも、ヤキモキしている。そんな事を直しつつ、好意を寄せていく。

セシリア・オルコット

イギリスの代表候補性。名家の生まれで、生粋のお嬢様。その為プライドが高く、周りに敵を作りやすい。モデル並みの容姿を持っており、女尊男卑の考えを持っていたが、一夏の強さに惚れてしまう。

シャルル・デュノア（シャルロット・デュノア）（専用IS ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡ）

フランスの代表候補性。一夏と信二に近づいてデータを取集する様に、IS学園に潜入する事になった。のちに女の子だとバレるが、それも受け入れた一夏に好意を寄せ

る。

ラウラ・ボーデヴィツヒ（専用IS シュヴァルツェア・レーゲン）

ドイツの代表候補性。ドイツのIS特殊部隊『黒ウサギ部隊』の隊長を務める。信二

と同じVTシステムで生まれた遺伝子強化試験体（アドヴァンスド）として生み出された試験管ベイビー。しかし、適合に失敗して左目はオッドアイに変色している

織斑 千冬

一夏の姉でIS学園の教師。1組の担任で、茶道部の顧問。元日本代表でISの世界大会の第一回モンドグロツソ総合優勝&格闘部門優勝者（ブリュンヒルデ）ドイツで1年間、軍の特殊部隊の教官を務めていたことがあり、ラウラに出会う。

山田 真耶

IS学園の教師。元日本代表候補生で普段はドジだがIS操縦の腕はかなり高い。ISスーツは胸が

大きすぎるためにセミオーダーの特注品を使っているがそれでも小さい模様。

ロゼッタ

1年3組の担任で晁の事を「坊や」と呼んでいる。本人は楽しそうだが、晁は嫌がっている。姉御肌のような豪快な人でクラスからも慕われている。

五反田 弾

一夏の親友、中学の同級生。市立の高校に通っている。一夏の入学の際、そのハーレ

ムっぷりを羨ましがっていた。

五反田 蘭

親友である弾の妹。一目惚れなんてあるわけない、と思っていたが一夏に会い、コンマ一秒で恋に落ちた。

篠ノ之 束

箒の姉にしてI Sを開発した天才科学者。箒、千冬、一夏以外の人間に対しては冷たい。妹の箒とはI S発表後の確執からあまり仲が良くない。宇宙に想いをかける晃(博)に興味を持ち応援していく。

クロエ・クロニクル

束と行動を供にする少女。黒の眼球に金の瞳、流れるような銀髪を持つ。料理が苦手。束のために毎日あれこれ作っている(正確には作らされている)が、そのたびに消し炭やゲルを作り出している(それでも束は平気で食べている)。ラウラと同じく試験管ベビーらしく、彼女の姉にあたる存在。

よく言う同姓同名間違えと言う奴である。しかし、それだけで殺された博はたまつたもんじゃない。

「はあ…「こうべ」と「かんべ」を間違えただけで勝手に殺すなよ…」

〈その…その事に関しては反省しているわ〉

「それで？僕はこれからどうなるんですか？」

〈もう怒っていないの？〉

「ここまで来たら怒る気になれませんよ…」

〈その…なんていうか。ごめんなさい…〉

「神様が謝らないで下さいよ」

〈わかったわ。それじゃあ、好きな願い事を4つだけ叶えてあげる。但し、「生き返らせてくれ」は無理だからね〉

そう言つて、博は神に以下の願い事をした。

- ・ 大学時代の頭脳を持つこと
- ・ 目を灰色からオッドアイ赤と灰色にすること
- ・ 健康な身体であること

そして最後にこんな事を願つた

「最後に…僕が生きている間に宇宙に連れて行くこと」

〈それだけでいいの?〉

「ああ、宇宙に行く事は僕の夢だからね」

〈わかったわ。それで、貴方が転生する世界だけど…
『インフィニット・ストラトス』の世界になるわ〉

「IS?知らないな…」

〈いずれ嫌と言うほど関わってくるわよ。それじゃあ行くわよ!〉

そう言うのと周りの世界が明るくなり始めた。博は不安半分、ドキドキ半分と言った気持ちであつた。

く女神sideく

私ソフィアの運命操作の誤操作により間違つて死んでしまった人間、神戸博がISの世界に旅立ったのを見守つて数分後、美の女神アフロディーテが声をかけてきた。

「あらくあの子もう行つたのね」

「何の様かしら?」

「別にく。貴女がへまして死んだ人間がどんな人なのか見に来てだけよ」

「フン…」

いちいち癪に触る言い方をする。それならここに来るなと思つた。

しかし、相手も神である故力としては同等かそれ以上にある。そんな彼女が、興味を

持つくらいの魅力が正直あるのかこの時は分からなかった。

「で、本当の目的は何よ?」

「だから、さつきから言っているでしょ。さつきの人間がどんな人なのか興味がるだけよ」

「だったら貴女も行けばいいでしょうI Sの世界に…あそこは女性がほとんどの世界だわ。直ぐに見つかるでしょう」

「そうね。ならそうしようかしら」

「え?」

「何よ?別にいいんでしょ」

「驚いた。そこまで興味があるなんてね」

「ええ、私の美の魅力でメロメロしてあげるわ。早速ゼウス様に行ってくるわね」

そう言つて、彼女アフロディーテは妖艶な肢体を揺らしながらゼウスの元へ向かうのであった。

私も彼が2度目の人生をどう迎えるのか興味があり、アフロディーテ同様にゼウスへ進言するのであった。

く女神side outく

side

僕は目を覚めると、見慣れない天井を見ていた。けど、今度は真つ暗な空間ではなく、外の光が差し込んでいた。近くで鳴く雀の鳴き声。走り去るバイクの音。そして、この部屋に向かってくる足音

「お兄ちゃん、起きて！起きて！起きて〜!!」

「…わかった。わかったよ。…おはよう紫音^{しおん}」

「えへへへ。おはようお兄ちゃん!」

僕は田島^{たじま}晃^{あきら}。今年高校1年生になろうとしている。

なろうとしていると言っていると語弊があるかもしれないが本当の事である。そう、僕こそ神戸 博がこの世に転生した姿である。

あの転生してから16年が経った。この16年で大きく変わったことがある。

それはI Sの台頭である。

正式名称「インフイニット・ストラトス」。科学者篠ノ之束^{しののたばね}により開発された宇宙空間

での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツである。

しかし、当初とは別に宇宙進出は一向に進まず、「兵器」へと転用されたが、現在は各国の思惑からアラスカ条約が締結されスポーツへと落ち着いている飛行パワードスーツである。

このパワードスーツは現行兵器が一切通じない。ISの前では銃弾はポップコーンの様になり、戦車は石ころ同然の扱いとなった。

IS一機があれば軍事バランスが崩れるくらいのパワーを持つている。

但し、これには大きな弱点がある。それは、「女性以外に使用できない」という弱点を抱えていた。

それにより女性主義の世の中『女尊男卑』と言う風潮が浸透しつつある。

しかし、この田島家では一切そんな兆しはみられなかった。寧ろ転生した僕を暖かく迎え入れていた。

そんな事を考えつつ僕は、学校の制服に袖を通し朝食を食べていた。

く晃 side out く

田島家の朝は早く、7時には朝食を取っていた。母の茜あかねが作る朝食は絶品でいつ食べても飽きない。

「おはよう母さん」

「おはよう晁。母さんもう出るから紫音と食べてなさい」

「わかったよ。いつてらっしやい」

「いつてらっしや〜い！」

そう言つて、晁は近所のスーパーへ向かうのであった。そして、紫音と2人で朝食を食べているとテレビのニュースである話題が放送されていた。

『ここで、臨時ニュースを申し上げます。先ほどI S適正試験会場にて初の男性操縦者が発見されました。名前は織斑一夏さん。あの白騎士こと織斑千冬さんの弟さんだと

ブリュンヒルデ

言うことです。この報告により、日本政府は織斑一夏さんを保護致しました。さらに、

全国一斉検査を開始するとの発表を行いました。繰り返します。先ほどI S適正試験会場にて男性の操縦者が発見されました…』

「へ〜男でも動かせた人がいるのか」

「もう！のんきなこと言つてないで早く出るよ！」

「わかったよ」

そう言つて、2人は残りの食事を済ませて食器を片付けて家を出た。学校に着くと今朝のニュースの内容で持ち切りであった。

それもそのはず、もしI Sを動かすことが可能であれば、あの女子生徒がいる『I S

学園』に入学することが出来るのである。男子達は皆やる気を出していた。一方で一部の女子生徒達は神聖なI Sに男が乗るなんて汚らわしいと思っっている者もいた。

朝のSHRで放課後にも、この学校でも適正試験を行うとの連絡が入って来た。

既に志望校を決めていた晃は正直言っただうでもいい話であったが、転生した時に女神が言っていた『いずれ嫌と言うほど関わってくるわよ。』の言葉の意味が引つかかっていた。

そんな事を考えつつ時刻は放課後になっていた。全男子生徒は体育館に呼び出され一体のI Sの前に並んでいた。

政府からの女性達が見守る中次々と試験が行われていた。周りからは「くそー！」とか「オーマイガー！」などの声が聞こえる中で、とうとう晃の番になった。

「ほら、ちやつちやつとやってよね」

「はい。…え？」 キューイン！

突然甲高い音が鳴ったと思ったら、晃の頭の中に物凄い量の情報が入って来た。
イコライザ イグニッション ノースト バッシブ・イナージェル・キャンセラ
 後付装備、 瞬時加速、 P I C そんな単語がどういう意味なのか、いつ使

うのかそして、最大の特徴は…

「う、?!打鉄を纏っている!」

「マジかよ!晃!」

「ハハハ…」

打鉄を纏ってほんの数十cmほど空中に浮いていた。

そこからの対応は異常であった。直ぐに別室に隔離され外部との連絡も出来なくなった。

そして、待つこと数十分。1人の女性が部屋に入ってきた。黒髪で目がキリつとしており、ビジネススーツを着こなしている綺麗な女性である。スタイルも良く一瞬女優かと思ってしまった。その人は晃に対して2、3質問した。

「君が田島 晃で間違いないな」

「ええ、そうですよ。貴女は？」

「私は、織斑おりむらち千冬ちふゆと言う。I S学園で教師をしている」

「そうでしたか。わざわざご足労をかけましたね」

「いや、これも仕事だからな。それよりも早速だがなぜI Sを動かすことが出来た？」

「さあ全く分からないですね…」

「…そうか。それと何か夢はあるのか？」

「夢ですか…そうですね…いつか宇宙へ行ってみたいですね」

「なるほど、それならI Sはうってつけの物だぞ」

「けど、今は兵器に展開している…」

「…」

「まあ、世界が思っていない方向に向かっているのであれば、正すまでですよ」

「何だか言い方が大人だな」

「…すみませんでした」

「まあ、いい。さて、今後の予定だがこれから田島には I S 学園に入学してもらう」

「すみません。僕は既にこの学校に入っていますが…」

「事態が事態だからな。明日限りで転校してもらう」

「…わかりました。但し、条件があります」

「何だ？」

「母親と妹にいい生活を送ってもらいたいので何らかの形で支援をして欲しいです」

「わかった。それなら、私の方から日本政府に問い合わせてみよう」

これが晃に出来る精一杯の親孝行になっていた。

後日支援を受けた母は、パートを辞めて紫音との時間を大切にしていた。紫音もお兄ちゃんの夢が一步前進した事に喜んでいた。

晃はその日の放課後に転校する事をクラスの人みんなに伝えた。その時男子は血涙を出すほど晃の事を恨んだり笑いながら送り出していた。

一方で女子からは嫌悪感が漂っていた。どうやら、女尊男卑に染まった者がいたよう

であった。

そして、次の日。家にIS学園側から資料が届いていた。電話帳くらいの厚みがある参考書には「必読」と大きく赤文字で書かれており、メモ紙に「入学する1週間後までに学習しておくこと」と書かれていたので、晃は自習に励むのであった。

一週間後。参考書とノートパソコン。2、3日分の着換えを持ってIS学園に向かって行った。

「それじゃあ母さん、紫音いってきます」

「ええ、いってらっしゃい」

「お兄ちゃん……」

「紫音。そんな顔をしないでくれ。ちゃんと長期連休の時は帰って来るから」

「うん……いってらっしゃい」

「わかったよ。それじゃあ！」

そう言つて、2人に挨拶してIS学園へ向かって行った。

IS学園にはモノレールに乗る必要がある為そこまでの道のりは黒塗りの護送車に

乗り込んで行った。モノレールに乗り込むと9割以上の女性がいた。それもそのはず、ISは女性しか動かすことが出来ないのです、それを整備するのも女性である。

晁は穴があったら入りたい状態に陥っていた。何だか客寄せパンダのところである。そんな元凶を作り出した織斑いたら一発殴ってもいいかなと思っていた。

やがてIS学園に着くと校門前に千冬が先週と同じ服装で立っていた。

「おはようございます。織斑さん」

「おはよう。早速で悪いがここでは「先生」で頼む」

「わかりました。織斑先生」

「うむ。それじゃ案内する。付いて来い」

そう言って、千冬の後について行き、職員室の前までやって来た。千冬に「少し待っている」と言われたので待つことにした。待っている間も色々と好奇心な目で見られていた。

そして、職員室のドアが開くとそこには千冬のほかに、真つ赤な髪を腰まで伸ばしており青い瞳でメガネをかけて、赤いルージュが印象的な顔だった。そして、はち切れんばかりのスタイルで晁を見ていた。

「彼女はロゼッタと言う。田島が編入する3組の担任だ」

「あらく初めましてロゼッタよ。宜しくね。坊や」

「よろしく願います。それと坊やはやめてください。田島 晃つて言う名前がありますから」

「わかったわ。宜しくね田島君」

「ええ、よろしく願います」

「挨拶は済みましたか。なら教室に向かってください。私も向かいますので」

千冬とは1組の前で別れた。別れ際に「何かあった相談しろ」と言われて晃とロゼッタは3組に向かうのであった。突如1組から黄色歓声が聞こえてきたが、晃とロゼッタは無視して教室に着いた。

「それじゃあここで待っていてね坊や♡」

「だから、僕は！ってもういないか…」

3組ではロゼッタが軽いSHRを行っていた。そして、「入ってきな坊や！」と言われたので晃は渋々入るのであった。

「え？坊やつてことは先生の子供!?!」

「そんなんじゃないよ。今日から編入する子だよ」

「失礼します」

入った瞬間割れんばかりの拍手ではなく、割れんばかりの歓声だった。

『キャー————!』

「ぐお!」

「男よ! 男子よ!」

「凄い! こんで見るとの初めて!」

「ああ、お母様私を産んでくれてありがとう! 今度の休みにおはぎ持つていくね」

最後に意味深な発言をした子を除いてある程度分り切っていたが、ここまでは思っていないかった。そんな女子達を口ゼツタが宥めて、自己紹介をすることであった。

「静かにしな! それじゃあ自己紹介頼むわね」

「はい、田島 晃と言います。昔から宇宙に興味があつていつか行つてみたいと思つています。趣味はこれと言つてないですが、読書が好きです。最近は身体を鍛えるためトレーニングをしています。こんな自分ですけど3年間よろしくお願いいたします」

パチパチパチパチ

どうやら、クラスの人達には受け入れられたようだ。そして、席は窓側の席になりSRは終わった。そこからは質問攻めの嵐だった。

「ねえねえ田島君つて何処に住んでいたの?」

「えつと…都内に住んでいたんだよ」

「体細いね？運動とかどうしていたの？」

「最近はしていなかったからこれからしていくよ」

「好きな子のタイプとかある？」

「落ち着くのある子が好きかなあ…派手好きはちよつとね」

「彼女いる？」

「年齢〓彼女いない歴だよ」

その言葉に周りの子達は「よし！」と心の中で唱えるのであった。そして、予鈴が鳴り授業が始まるのであった。

授業は一般教養に加えてI S専門分野がある。晃は事前に「必読」と書かれていた参考書を読んでいたののみなと同じレベルについていった。

「ここまででわからない人はいない？」

『大丈夫でーす！』

「坊やはどうだい？」

「それで貫くんですね…僕も大丈夫ですよ」

「よろしい。では以上で終わるよ」

そして、昼休みになった。晃は食堂に向かう途中で2人の女子生徒に声をかけられ

た。

「ねえねえ田島君一緒に食堂に行かない？」

「案内、しますヨ」

「ありがとう。えつと……」

「私は高橋あやめつて言うよ」

「How are you?アー、ワタシの名前は、サーシャ、言います。よろしく願いますね。」

『初めましてアキラ タジマと言います。よろしく願いますね。ミスサーシャ』（流暢な英語）

「へへ田島君英語出来たんだ」

「うん……ちよつとね」

「私、日本語、勉強していまヨ。だから、日本語で大丈夫ですヨ。アキラサン」

「そうかい、なら僕も教えてあげるよサーシャさん、あやめさん」

「Thank you!」

「それじゃあ行きましようか」

食堂に到着すると40近いテーブルがあり、中々壮観な景色であつた。ここでは和洋、中、はたまたイタリアンやフレンチまでそろっている。そんなIS学園の食事は食

券制で何と全てタダ来た。

早速晃は好みのメニューを頼もうとした時ある人物とぶつかってしまった。

「うおースゲーな筈！」

「大きな声を出すな一夏。はしたないぞ」

「いいから早く食べようぜ！」ドン

「痛った！」

『田島君（晃サン！）』

「ああ、わりい、わりい。うん？」

「すまない大丈夫か？」

「ええ、平気です」

「もしかして2人の男性操縦者ってお前か？」

「…だったらどうしますか？」

「悪かったな。俺は織斑一夏って言うよ」

「…田島晃です。よろしくお願いします」

「よろしくな晃！俺の事は一夏って呼んでくれ！」

そう言つて、一夏は右手を出してきたが、晃はそれを拒否した。

「…すみません。初対面の人と馴れ馴れしく呼べないので織斑君でいいですか？」

「そんなこと言うなよなよ！」

一夏は仲直りのしるしに肩を組もうとして来たが、晃はこれを拒んだ。

「ちよつとやめてください」

「なんでだよ。いいだろう男同士仲良くやろうぜ」

我慢していたがここまでチャラチャラしているとは思ってもおらず、遂に晃の堪忍袋の緒が切れた。

「…加減に」

「うん？」

「いい加減にしろ!!そのせいで、どれだけの男が苦しんだと思ってるんだ!」

晃の一言で周りにいた生徒のみならず箒やあやめ更にはサーシャまでもが固まってしまった。

「え？」

「いいか!この際はつきり言わせてもらう。君が勝手にISを起動してしまったせいで僕の学校生活が終わったんだぞ!普通に生活するはずがISの勉強をする羽目になり、それどころか志望校に行けなかったんだぞ!」

「で、でも「でもじゃない!」お、おう…」

「以後僕に余り近づかないでくれ…」

そう言って、晃は食堂から出て行つた。その後をあやめとサーシャが追いかけてきた。当の本人はどうなっているのかさっぱり分からず仕舞いであった。

そして、屋上に着いた晃は一人柵に寄りかかっていた。そこにあやめとサーシャが息を切らせて走つて来た。

「はあ、やつちやつたなあ……こんな事なら嫌な顔せず取り繕っていた方がいいかな……」

「はあ、はあ、ここにいた」

「探しましたヨ……アキラさん」

「あやめさん……サーシャさん……」

「勝手に走つて行くから、焦つたよ」

「ワタシもです。どうしたんですか?」

「別に……ただあの空気の中食事する気分じゃあなかつたんだ。それよりも早く食堂に行きなよ。早く行かないと昼休みが終わるよ」

「うくん。そうしたんだいけど、田島君が心配だからここにいろよ」

「ワタシも、晃サンが、心配なので、ここに、いますね」

「あやめさん、サーシャさん。ありがとう」

「それに、いつまでも「さん」付はやめて欲しいなあ♪折角友達になつたんだからね」

「ハイ!サーシャもその方がいいデス」

「けど…」

「ほら、言ってみて！」

「えつと…あやめ。サーシャ／＼／」

晃は2人からの眼差しに耐えられず名前を呼んでみた。思いのほか恥ずかしさが出てしまい、顔が赤くなつていくのがわかる。その時2人は（可愛い〜！）と思っていた。

結局昼飯を抜いた3人は授業中お腹の音が鳴らないように必死に我慢していた。

そして、放課後。晃はロゼッタから寮について説明を受けると、部屋である「3030」に向かうのであった。なお、荷物については茜と紫音が用意してくれた。早速「3030」号室に向かい、ドアをノックした。

中からは生活音が無く、開けてみると誰も居ない。どうやら、1人部屋だった。しかし、ベットが2つあるので晃は手前の方を使うことにした。荷解きをしている時にドアをノックする音が出たので出てみるとそこには…

「はい。あれ？あやめとサーシャじゃないか。どうしたんだい？」

「えへへ、遊びに来ちゃった」

「同じくデス。今いいデス？」

「ちよつと待っててね」

そう言うとき晃は、衣類等をクローゼットや収納ボックスに入れてから改めて2人を招

待した。

「どうぞ。荷解きしてちよつと散らかっているけどね」

「そうなんだ。手伝うよ」

「そんな、お客さんに失礼だよ！」

「平気です。それに、晁サンの荷物、興味がありません！」

「そうだよね、私も楽しみだよ」

「あやめ：はあくならお願いしようかな」

「うん！（ハイ！）」

そして、3人で荷解きの続きをしていた。終わると晁はコーヒーを入れてゆつくりとしていたがそこに、招かれざる客が入って来た。

ドンドンドンドン！

「誰だこんな時に：はい。って君か」

「良かった！助けてくれ晁！」

「気安く名前を呼ばないでくれ」

「そんな事言わずにな！頼むよ」

「断る。僕に君を助ける義理はない」

「食堂の件は謝るから！な！俺たち友達だろ！」

「そもそも、僕は君を友達とは思っていない。それに、事情を知らないと対処のしようがない」

「えつと……ちよつと長くなるんだけど」

「どうしたの晃君」

「どうしたんですか。晃サン？」

「ちよつと面倒な事になりそうなんだ。すまないがお茶会はまた後日でいいかな？」

「うんいいよ。それじゃあまた明日ね」

「また、明日デスね」

そう言つて、2人は部屋を出て行つた。そして、一夏は事の顛末を話し始めた。全ての話しを聞いて晃は頭を抱えてしまった。常識がなさすぎる。何でこんな奴の問題を解決しなければならぬのかと思つていた。

「はあく君は馬鹿か」

「ちよ！馬鹿はないだろ」

「じゃあ、非常識人？」

「それつて結局馬鹿と同じだろ」

「そうだな。よく分かつたな」

「ちよつと酷くないか！」

「こんな相談を受けた僕の身にもなってくれよ……」

要約すると、一夏は織斑先生と山田先生から部屋のカギを貰って行ったのはいいが、ノックもせずに入って行った。

そこに、既に部屋でシャワーを浴び終わっていた幼馴染で篠ノ之箒と運悪く鉢合わせしてしまった。そんな彼女は気が動転しており木刀を取り出した。

だが、木刀に掛けてあつた下着を見て一夏が「箒も女の子らしくなったなあ」と言つてしまう。

それに腹を立てた箒がドアを破壊するくらいの力で襲つてきたので、一夏が命からがら逃げてきたのだ。

因みになぜ晁の部屋だと分かったのかは、「適当に叩いたら晁が出てきた」と言っていた。この時ばかりは、神の事を少しいや、かなり恨んでしまった。

しかし、ここで放置するのは目覚めが悪いと思っていた。

「はあく仕方ない……」

「じゃあー!」

「今回だけだ。こっちは君のごたごたに巻き込まれたくないんだよ……」

「ありがとうな! やっぱり晁は頼りなるな!」

「だから気安く名前を呼ぶな」

「一夏！居るのだろう！」

「げ！箒！」

「…ちよつと待つてろ」

そう言つて、晁は廊下に出るのであつた。そこには、剣道の袴姿で立つている女の子がいた。さつきの事から件の箒つて子だろうと晁は思った。

「貴女が篠ノ之さんで間違いないですね？」

「うむ。そう言う貴様は？」

「僕は田島 晁です。一応2人目の男性操縦者つてことになっていますがね」

「そうか、失礼した」

「いえ、大丈夫ですよ。それより話しはこの部屋にいる馬鹿から聞きました。災難でしたね…」

「ああ、そう言つてもらえると心が軽くなる」

「じゃあ、単刀直入に言います。中にいる馬鹿と仲直りしてください。僕から言えるのはそれだけです。それに、先程僕の方でも注意をしておいたので、多分反省していると思いますので…」

「うむ、私も少しやりすぎたと思つている」

「見たところ有段持ちですね。そんな人が木刀を使えばどうなることも分かるはずで

が…」

「うー！」

「はあくもういいです。後で向かわせるのであと煮るなり焼くなり好きにしてください」

「分かった。それとこれからは私の事は箒でいい。余り苗字で呼ばれるのは好きではないのだから…」

「わかりました。僕も晁でいいです」

「そうか、なら晁今後ともよろしく」

「出来ればあの馬鹿とは関わりたくないんですけどね…」

そして、一夏にもう箒は怒っていないからさっさと帰る様に言っ出てもらった。

こうして、波瀾万丈のIS学園での生活が始まるのであった…

第2話 クラス代表決定戦〜前編〜

翌朝。晃はIS学園のジャージ姿になり、部屋で準備運動をしてから、IS学園の外周（1周約5km）を3周し、腹筋・背筋・腕立て伏せを30回×3セット行っていた。

そこに、同じくジャージ姿の千冬が現れた。

「おはようございます。織斑先生」

「おはよう田島。よく眠れたか？」

「ええ、自分ベットが変わると眠れない体質なんですけど、ここのベットは最高ですね」

「そうか。それは良かった」

「はい。話しは変わりますが、お宅の弟さんたちの件どうなりましたか？」

「一応事件の関係者なので事の成り行きを聞いておこうと思っただが、晃が思っていた事とは違う答えが帰って来た。」

「どうなったとは？一夏が何かしたのか？」

「何も聞いていないんですか？」

「ああ、昨日は遅くまで仕事をしていたからな。特に聞いていなかった…」

「はあ…」

何度目かため息を出し、晃は呆れていた。そして、億劫ではあるが昨日の事件を千冬に話した。

「あの馬鹿者はー！あれほど何かあったら相談しろと言ったのに…」

「その分だと聞いていなかったんですね…」

「ああ、だがこれではつきりした。田島迷惑をかけたな」

そう言つて、千冬は頭を下げた。慌てて晃は頭をあげる様に言つた。

「頭を上げてください！僕はこんな事で責めたりしませんから！」

「しかし…」

「それに、もう過ぎた事です。今更ぶり返したりしたくないです」

「そうか…わかった」

「そろそろ朝食なので、それじゃあここで失礼しますね」

「わかった。その話しは私から織斑に言っておく」

「そう言つてもらえると嬉しいです。では失礼しますね」

そう言つて晃はその場を後にした。そして、自室に戻りシャワーを浴びて食堂に向かうのであった。

今日は1人で来れたので食券機の前で悩んでいると3人組の女子生徒達が集まつて来た。

「ねえ君って2人目の男性操縦者かな？」

「そうですけどあなた達は？」

「私は1組の子なんだけど一緒に食べてもいいかな？」

「いいですよ。特に食べる人とか決まっていけないので」

3人は「やったー！」と喜んで列に並ぶのであった。そして、晃は焼き魚定食、他の3人はサンドイッチと軽めの朝食だった。

但し、着ぐるみ姿の子だけは晃と同じ焼き魚定食になっていた。

「それじゃあ、自己紹介ね。私は鷹月たかつき 静しず寐めって言います」

「わたくしは四十院しじゅういん 神楽かぐらと申します。以後お見知りおきお」

「布のほ仏とけ 本音ほんねって言います！よろしねえっと……」

「田島晃です。3組にいます。世間では2人目の男性操縦者ってなっているけどね」

「うん！よろしくなのだアッキー！」

「アッキー……なんか、渾名とか付けられたのは初めてだから、不思議な気分だね」

「そうなんだ！意外だね」

「うん。そう言えば田島君って目の色が……」

「ああ、これかい。気味悪いだろ。世間ではオッドアイとか言うけどね……」

「違う、違う！何だか珍しいと思ってね。格好と思ってね／＼／」

「ええ、殿方をこんなにも綺麗だと思ったのは初めてですから」

「そうかな？ 君たちのクラスには織斑一夏と言うイケメンがいるじゃあないか」

「あく織斑君ね…」

「…アイツがどうかしたのか？」

静寂が苦笑いをしてきたのでその理由を聞いたです。

「実は、クラス代表を決めるときにある人と喧嘩になったんだよね」

「ある人って」

「それは『それは、わたくしの事でしようか！』あう…」

静寂の回答を待たずに第三者が割り込んで来た。金髪に縦ロール。蒼い目をしており抜群のプロポーションで優雅にかつ大胆に晁の前まで迫ってきた。

そして、IS制服をふらりと巻き上げて来た。

「貴方が2人目の男性操縦者ですか？」

「ええ、そうですよ。ミスオルコット」

「まあ、わたくしの事をご存知だったのですね」

「ええ、その若さでイギリスの代表候補生。BT兵器を得意とする機体『ブルー・ティーズ』のパイロットで合ってますかね？」

「まあ！ 素晴らしいですわね。そこまで詳しいとは恐れ入りますわ」

「この学校に入る際に勉強して来たんですよ」

「それでも殊勝な心がけですわ。どうですか？ 貴方とならいい意見交換ができそうですけど」

「悪いけど遠慮しておきますよ。僕はしがいない一般人。貴女ほどの実力もなければ力もない。ただISを動かせるだけの男ですよ」

「そうでしょうか…わたくしにはとても魅力的な方だと思えますがね」

「それこそ、織斑の方が適任でしょう。僕は3組なので貴女とは会う機会が少ないのですから」

「セシリアとお呼びになってください。えつと…」

「失礼。田島晃です」

「では田島さんで」

「じゃあ僕もセシリアさんで」

「ええ、ではこれでまた会える日を楽しみに待っていますわ」

そう言つて空になったプレートを返却してセシリアは去つていった。それとすれ違いで一夏と箒が食堂に入つて来た。その顔はぐったりしていた。

「どうやら、朝一で千冬にこつてりと絞られたみたいだ。」

「それじゃあ、僕はもう行くよ。またね。鷹月さん、四十院さん、布仏さん」

「うん」

「ええ」

「ばいばい、アツキー！」

「おう、晃じやないか！おはよう」

「…はあ、おはよう」

「何だつれない顔して？」

「別に」

「それより、お前千冬姉に昨日の事話しただろう！」

「それが何か？」

「そのおかげで、朝から怒られたんだぞ！どうしてくれる！」

「知らないね。そもそも君が昨日の時点で織斑先生に話しておけば、こんな大事にならないだろう」

「うぐ！」

「大体、当事者でない僕に当たってくるのはお門違いだと思うけど」

「でも「でもじゃない！」う…」

「それじゃあ」

「あ、おい待てよ！」

一夏は晃の肩を掴もうとした時、誤って背中を押してしまった。とつきの事だったため、晃は受け身を取ることが出来ず廊下に倒れこんでしまった。

「ぐはー！」

「晃！」

「田島さん！」

直ぐに箒が介抱する。そして、その場に居合わせていたセシリアも現れたのである。

「大丈夫か晃」

「大丈夫ですか田島さん」

「…ありがとう箒さん、セシリアさん。僕は大丈夫です」

「あ、あの〜」

「一夏やり過ぎだぞー！」

「そうですわ！」

「え、いやその…」

「それじゃあ…」

2人に起こされた晃は何も話さずにその場を後にした。自室に戻って身体を確認すると青あざが数か所付いていたのを見てもう少し鍛えないといけないと思った。

そして、教室に行き2時限目が終わり3時限目の準備をしていると突然ロゼッタ先生

がこう言っついて来た。

「そう言えば、3組のクラス代表を決めないとね。クラス代表とは、そのままの意味で生徒会の会議や委員会への出席やその他諸々を決定する時に必要な人だよ。決まれば一年は変更なしだからね。自薦、他薦は問わない。誰かいないかしら？」

「はい！田島君がいいと思います！」

「私も！」

「アタシも！」

「ちよつと待ってよ！」

「ヒュ〜モテモテだね坊や。それじゃあクラス代表は田島に『ちよつと待ってください

！』うん？」

「納得出来ません！男がクラス代表だなんて！」

「それはどういうことだい。ミスターニャ」

そこには、緑髪で緑色の瞳。出るところは出ており、美人だが筋肉質の女子生徒がいた。確か彼女は…

「男だけでクラス代表になるなんて、信じられません！この世は実力主義！力こそ全てです！軟弱な男がクラス代表になったらクラス恥さらしもいいところですよ！それだつたらこのジャマイカ代表候補生のターニャ・アジャイルがクラス代表になります！」

「言いたい事はそれだけかい？」

「うん？」

「確かに、僕はISに関しては素人同然で男だ。けど君みたいに力だけで全てを解決するようなやり方は好きにはなれない。仮に君がクラス代表になったとしてもいい思いはしないだろうね」

「それはどういう意味よ！」

「ISには力がある。但しいい方向に使えばよいが悪い方向に使った場合どうなる？ 3組は力だけでのし上がった組だ。暴力的な奴らがいっぱいいると思われるだろうね。そんな人達と友達になろうと思う人は少ないと思うよ」

「うー！」

そう言った瞬間、ターニヤ以外の子達が俯き始めた。

しかし、一部の人間は感動していた。どうやら、女尊男卑の思想に染まった人がいるようだ。こんな人達を放つてはおけなかった。

「ロゼツタ先生」

「うん？」

「僕もクラス代表戦にエントリーしてもいいですか？」

「いいだろう。それじゃあ期限は一週間後。一組の代表決定戦の後に行うよ。それまで

準備しておくんだね」

こうして、ターニヤと晃はクラス代表で戦うことになったのだ。

その日の放課後。あやめとサーシャの3人で職員室に向かっていた。晃はクラス代表決定戦までにISを使った訓練をしたい為にロゼツタに相談する為である。

ちなみに、あやめとサーシャは朝の出来事を聞いた途端自分達もついて行くって言うて聞かなかった。

そして、職員室についてロゼツタを呼び出した。しかし、肝心のロゼツタがいなくそこに居たのは千冬ともう1人の先生だった。

「失礼します！ロゼツタ先生はいらっしゃいますか？」

「うん？どうした田島？」

「織斑先生。ロゼツタ先生は居ますか？」

「生憎所用で外出してるから、今日は帰って来ないと思うぞ」

「そうですか…」

「なにか相談事か？良ければ聞くぞ」

「しかし…」

「田島。入学した時言ったよな、遠慮なく相談しろと」

「…わかりました。実は、今度クラス代表の決定戦をする事になったので、それまでにI

Sの訓練をしたいのです。だから訓練機を貸していただけないでしょうか？」

「そっか、なら訓練機と相手も用意してやる」

「本当ですか？」

「ああ、先に第4アリーナに向かっている」

そう言つて、晃達は職員室を出て第4アリーナに向かうのであつた。そこには、学園の訓練機である打鉄とラファールがそれぞれ1体ずつ置いてあつた。

そこにはツナギを着て調整を行っている女子生徒たちがいた。

「初めまして、私はライラ。ここで整備主任をしている」

「田島晃です。よろしくお願いします」

「うむ！それじゃあどれに乗るのか決めてくれ。打鉄は防御力があり安定した性能を誇るガード型で、初心者にも扱いやすい。対してラファールだが安定した性能と高い汎用性、豊富な後付武装が特徴の機体だよ」

「う〜ん…」

「最初は、扱いやすいラファールにしてみたら。特にこの子はさつき整備が終わったばかりだから飛びたがっているからね」

「分かるんですか？」

「何となくだよ。さて、それじゃあISスーツに着替えてきなよ」

「はい」

晃は渡されたISスーツに着替えてきた。どこかエ○ンゲリオンを思わせるその格好に集まっていたメンバーからはうおーと声が出ていた。

「着替えてきましたけど…なんかスツキリしますね」

「でしょー！ いやーやっぱり男の人のISスーツで目に毒だよね」

「…それは褒め言葉ととつてもいいんでしょうか？」

「気にしないで！ さて、乗ってもらおうよ。ラファールに触れて」

「分かりました」

そう言つて、用意されたラファールに触るのであった。そして、頭の中に情報が入つて来るのがわかる。どうやって動くのか、武器の種類などが手に取る様にわかつてきた。

「それじゃあ、フィッティング最適化をするから身体を預けるような形で乗り込んでね。あとはシステムが勝手にやるからね」

「はい」

晃はラファールに預けるような格好で乗り込む。そして、あちこちで電子音が鳴り響いて画面がクリアになった。液晶画面には『システムオールグリーン』の文字が表示された。

「うん。バッチリだね。それじゃアリーナに出てもらうかな。相手はもう出てるみたいだし」

「分かりました」

晃はカタパルトまで歩いて行った。そして、セットが完了した時アナウンスが入った。

『カタパルト射出完了。ラファールシステムオールグリーン。発信タイミングを晃君に譲ります』

「分かりました。それじゃあ、田島晃、ラファール出ます!」

発射時のGを感じながら晃とラファールはアリーナの空へと飛び立った…

「おお!これが空か!これが飛んでるってことか!」

晃は年甲斐もなくはしゃいでいた。飛べたことが嬉しい。そして、ISを纏ってあの空に飛びたてた事が出来たのが何よりも嬉しかった。その興奮は覚めることなく、どんどん高度が高くなっていった。

『馬鹿者!高度限界まで飛んでどうする!』

「織斑先生?」

『そうだ。今回の訓練では私が監督する。そして、お前の相手は…』

「初めまして。貴方が2人目の男性操縦者さんね。私は更識さらしき楯無たてなしよ。よろしくね♪」

「田島晃です。よろしくお願いします」

そこには、水色のシヨートヘアに赤い目。IS学園のカーデイガンを着て、水色のI Sを纏った女の子がいた。

リボンが黄色である事から、2年生だ。因みに青が1年生、赤が3年生である。

「うんうん、ちゃんと挨拶出来る子はお姉さん好きよ」

「どうもありがとうございます」

『挨拶は済んだか。それじゃあ訓練を始める。始め!』

「行くわよ〜!」

「来い!!」

晃にとって初めての模擬戦が始まった。晃は回避運動をしている時にラファールの武装を確認していた。

五五口怪アサルトライフル

始めに距離を取るために、ヴェントでけん制したが、難なくかわされた。それでも必死に頭の中で次の作戦を立てていく。

(マズイ。相手はかなりの手練れ。対して僕はずぶの素人だ。けど、やられっぱなしにはいかない。考えろ!)

『ほらほらどうしたの! そんなに逃げてばかりじゃあ勝てないわよ!』

「つく! ならばこれだ!」

次にコールしたのは六二〇レイン・オブ・サタデイ×2丁口径連装ショットガンで手数で勝負しようとしたのだ。

これには一瞬だが楯無に焦りの色が見えた。しかし、直ぐに立て直した。

『へえ、やるじゃない。お姉さんちよつと本気で行こうかしら』

「なら、次はこれだ！」

晃はレイン・オブ・サタデイ×2丁を撃ち終わると、近接ブレット・スライサーブを手にして楯無に突貫して行った。

楯無は大型ランスの蒼流旋を構えると同じように晃目掛けて突っ込んだ。

ここで晃は（かかった！）と思つて、頭の中で五九〇デザート・フォックス×2丁口径重機関銃を思い浮かべ、次の瞬間には両手に五九〇デザート・フォックス×2丁が握られていた。

そして、突っ込んで来る楯無目掛けて乱射した。みるみるうちにシールドエネルギーS Eが減つてい

くのがわかる。

「よしー！」

『うえ！そんなのあり！』

「まぐれでも出来るもんだな！」

『そうなのね…だったらこれはどうかしら！』

楯無は一旦距離を開けて蛇腹剣ラスティ・ネイルを取り出すのと同時に濃い霧を

発生させた。そして…

『ねえ、今日なんだか暑くないからしら？』

「そんなことないと思いますよ」

『なら、どうして霧が出来ているのかしらね？』

「そりゃあ…はっ！」

『今更遅いわよ！クリア・バツンヨソ清き熱情』

「しまっ！」

ドガーン!!

突然、晃の周りで大爆発が起こった。楯無は水のヴェールを濃い霧状にして充満させ、それを一斉に熱に転換したため、大爆発が起こったのだ。

これには、流石の晃も対処出来ずモロに受けてしまった。楯無自身（ちよつとやり過ぎちやつたかしら…）と思う程だった。

そして、砂煙が晴れるとフラフラになりながらも六一口径アサルトカノングムを握ったまま立っている

晃が楯無に銃口を向けるとそのまま倒れた。

どうやら気絶してしまっただけらしい。

『た、田島晃S Eエンプティ！勝者更識楯無！誰か早く担架と医療班の準備を！』

いつの間にか集まっていた、アリーナの生徒があ然とする中千冬から楯無に
プライベート・チャネ
個人間秘匿通信がかかっていた。

『更識』

「は、はい！なんでしょうか織斑先生」

『馬鹿もん！やり過ぎだ！』

「す、すみません！」

『田島は昨日来たばかりなんだぞ！そんな奴相手に、全力を出す馬鹿が何処にいる！』

「ええ！そうなんですか！」

『そうだ。それに、今回はあくまでも訓練なんだぞ！田島がI Sを扱えるかどうかの確
認に過ぎないのだ。それを全力でやりおつて…全くこれで再起不能になったらどうす
る』

それ程重要な子に不味い事をしたと思うと、血の気が引いてきた。

『まあいい。兎に角更識、覚悟しておくんだな』

「えー！」

『今回の件は学園上層部に報告しておく。追って連絡をする。以上だ』

そう言つて通信が終わり、同時に楯無も終わった。上層部に連絡されるのは構わな
い。しかし、あの人に知られてたら不味いどころの話じゃないと思うと頭が痛くなつ

た。

IS学園医務室には訓練で楯無の大爆発を受けた晃が横になっていた。初のIS訓練で、あの特技を食らったのだ。無事で済んでるのは訳がある。ISの救命領域が対応したのだ。

ISには絶対防御があり、すべてのエネルギーを防御に回すことで、操縦者の命を守る。同時にISの補助を深く受けた状態になるので、ISのエネルギーが回復するまで、操縦者は昏睡状態に陥ることになり、晃はその状態になっている。

担任のロゼッタ先生もお見舞い位の大事な生徒の1人である。そこに、千冬と楯無がやって来た。

「ロゼッタ先生。田島はどうなっていますか？」

「今は、ぐっすり眠っているよ。下手な後遺症も残っていない。医者の話しだと明日にも退院できそうだ」

「良かった」

「お前はもう少し加減を考えんか」

「いて！」

「ハハハ！楯無にやられたら坊やも本望だろうね」

「笑い事じゃあないですよ…」

「確かにそうだがな。だがな、代表候補生の強さを知ることが出来たんだ。いい勉強になったと思うよ」

「だといいですけどね…」

「そーいやあ織斑一夏もクラス代表決定戦に出るんだらう。そつちは大丈夫かい？」

「織斑は、篠ノ之が特訓すると言つて出て行つたきりですな」

「ISは？」

「貸し出しの申請は出てないので、やっていないでしょうね…」

「大丈夫かそれ？」

「我が弟ながら呆れて物も言えませんよ」

「まあ、ウチにも坊やに戦いを挑んでいる奴がいるが、正直勝てるかどうか五分五分だな」

「彼なら何とか出来るでしょう。何せIS学園最強の生徒会長に訓練であそこまでやっていたので…」

「ええ、彼には驚かされましたよ。まだまだこれからです」

「なら、次は手加減をするんだな」

「…はい」

そう言つて、3人は病室を後にするのであつた。

翌日。ロゼッタの言う通り後遺症もなく、晃は退院することができた。医者からは2～3日は安静することを言われたが時間が無い。

少しでも学ぶため、晃は学園の資料室に赴きターニヤの過去のデータを読み漁り対策を練っていた。

3日間の休養を終えて再びISでの訓練が始まった。楯無は「あの時すみませんでした！」と土下座する勢いで頭を下げて来たので「もう気にしていない」と言っただけで何とか慰めた。

あれ以降晃はラファールを乗りこなしていた。武器の豊富さ、汎用性、機動性に特化したこの機体なら勝てると思っていた。

晃は楯無からのアドバイスもスポンジの様に吸収して行った。反復練習も行い何とか楯無から合格の印まで貰った。

そして、試合当日。場所は第一アリーナEピット。先に1組の代表決定戦を行い、次に3組の代表決定戦を行う。

その為晃は一夏とは反対側のピットに居た。そこにISスーツを纏ったセシリアが現れた。

「あら、田島さんごきげんようですわ」

「セシリアさん。元気そうだね」

「ええ、今日の日のために調整して来ましたからね。田島さんは？」

「僕も、更識さんとISの訓練をしてきたから大丈夫だと思っよ」

「楯無さんと!?それは凄いですね」

「そんなにかい？」

「ええ、彼女はIS学園最強の『生徒会長』の称号を持ち、ロシア国家代表を務めている方ですわ」

「…そんな人と僕訓練してたのか」

「…因みにですがどんな感じの訓練でしたの？」

「えつと…イグニッション・ブースト、アクセルリミット・ター、サークル・ロンド
あつただけど流石に早すぎるって言われたけどね」

「……」

「セシリアさん?どうしたの?」

「田島さん…いえ、晃さん!クラス代表決定戦が終わりましたらわたくしに師事して頂

けないでしょうか！」

「ええ！そんなの無理だよ！」

「でしたらいつか教えてくださいますし！」

「ええつと…いつかね？」

「絶対ですよ！」

「分かりましたよ、セシリアさん」

「敬語も不要ですよ」

「昔からの癖みたいなもので中々治らなくて…すみません」

「大丈夫ですよ。ですけどいつか呼んでくださいね」

「分かりました」

そう言った途端アナウンスが流れ1組のクラス代表決定戦が始まろうとしていた。

『これより、1年1組のクラス代表決定戦を行います。選手は所定の位置に着いてください。繰り返します…』

「では、行ってまいりますわ」

「ええ、頑張ってくださいね」

「はい！」

そう言って、セシリアは自身のIS「ブルー・ティアーズ」を纏っていた。全身を蒼

い I S が纏っており武装であるスターライト mk III も手に握られていた。

「それがブルー・ティアーズなんですね。とっても綺麗ですね」

「は、恥ずかしいですわ／＼／＼」

「ごめん、ごめん！余りにも綺麗だったのてつい…」

「褒め言葉として受け取っておきますわ。では今度こそ行つてまいりますわ」

「ええ、いつてらっしゃい」

そう言つて、セシリアはアリーナの空に飛び立つて行つた。果たして結果は…

結果から言うと、セシリアの勝利だった。一夏の I S 「白式」は先にブルー・ティアーズの 4 基のビットを破壊しながらセシリアに突撃してきたがミサイル 2 基で終了と思つていた。

しかし、織斑は機体に救われたのかファーストシフト一次移行に移行し、白式の本来の姿となつた。

更に、ワンオフアビリティである〈零落白夜〉を発動してあと一步と言つところまで行つたが、S E が 0 になり自滅という形で試合終了となつた。

晃は E ピットに戻つて来たセシリアに労いの言葉を掛けるのであつた。

「お疲れ様です。セシリアさん」

「ありがとうございますわ。しかし、齒がゆい試合でしたね」

「アハハ…あれは機体を把握していない織斑が悪いね」

「そうですわね。ですが次は晃さんの番ですわよ」

「ええ、期待しないでくださいいね」

「そう言うわけにはいきませんわ。頑張ってくださいまし！」

そう言つて、晃は愛機であるラファールを待つていたが一向に現れない。実は試合前に整備主任のライラに預けたつきり帰つてこないのだ。不安になつて来た晃は連絡しようとしたら、ハンガーから出てくるライラを見つけ出した。

「いや～ごめんね。遅くなつて！準備するのに手間取つてさあ～」

「大丈夫ですよ。それで、僕のラファールは何処にあるんですか？」

「フフフ！よくぞ聞いてくれた！さあ刮目せよこれが、整備部総出で作り上げた君専用のラファールだ！」

そう言つて、出てきたのはラファールと言うよりも何処かの王族に使える近衛騎士みたいな感じのISだった。

カラーリングは赤色を基調とし胸の辺りで白い線で交差している。背中にはバーニアが2門。それを覆う形で蒼いマントが靡いていた。

両足に1門バーニアが付いており機動性が確保されている。ブレードはショートブレードよりも長く中世の騎士がもつ両刃であった。そして、最大の特徴としては…

「全身装甲ですか？」

「ええ、これで、防御力もバッチリよ！」

「肝心の武装は？」

「ラファールをベースにしているから武装もそのままよ」

「そうですか良かったです」

「さて、最適化処理
「さて、フィッティングするから、もう一回 I S に触れてくれる」

「はい」

そう言うって、I S に触れた瞬間であった…

（初めましてマスター）

「?…セシリアさん何か言った？」

「いいえ、わたくしは何も言ってませんわ」

「おかしいなあ？」

（おかしいのはマスターですよ）

「?…ライラさん何か言いましたか？」

「うん？何のことだい？」

「うゝん？」

（ここですよマスター！私です！）

なんと、目の前のISから声が聞こえて来たのだ。これには晃はびつくりしていたがISはお構いなしに話してきた。

（まあ、いきなり喋って来たらびつくりしますよね。何せこの声はマスター、貴方にだけしか聞こえていませんから）

晃は訳が分からない状態で、聞いていたが、流石に3回となると驚きはしなかった。だが、どうやって会話すればいいか悩んでいると向こうから言ってきた。

（今、私はマスターの頭の中に直接語りかけています。ですから、マスターが思っている事を言えればいいと思いますよ）

そう言っても状況がまるで飲み込めないんだが…

（でしようね。話すとき長くなりそうなので簡潔に述べると…私が貴方を気に入ってからです）

そんなで決めちゃっていいの？

（ええ、流石に直ぐには出来ませんでした。貴方が楯無から必死に学ぶ姿勢やひたむきに努力する姿、何よりも私達の母様の夢である宇宙へ行きたいとの願いが一番の原因ですけどね）

母様ってことは篠ノ之博士の事かい？

（ええ、近く会いに行くとまで言っていましたからね）

そうかい…：なら、僕は君を退屈させないように頑張るよ

(それはないですね。私はマスターにぞっこんですから)

わかったよ。それじゃあ行こうか。えつと…

(私はまだ名前がありません。ですからマスターが決めてください)

なら…：Space Knight^{宇宙騎士}ってのはどうだ？

(いいですね。ならその名前で登録しておきますね)

そう言つて、ディスプレイには「Space Knight」の文字が表示された。これで、名実ともに晁の専用機となったのだ。

「よし！それじゃあフィッティング完了！」

「それじゃあいつてきます！」

「ええ、田島さんいつてらっしゃいませ」

「ぶっ壊れても良いから勝つてきなさいよ！」

そう言つて、フルスキンのISを纏つて蒼いマントを翻し、カタパルト射出口へ向かつて行つた。

その時姿を見たセシリアは「まるで、戦に向かう騎士そのものでしたわ。もし、田島さんがクラスメイトであれば、お近づきになりたいくらいですわ」と語っていた。

『カタパルト射出完了。システムオールグリーン。発信タイミングを晁君に譲ります』

「了解しました。田島 晃「Space Knight」です！」
(いきまーす！)

第3話 クラス代表決定戦〜後編〜

Space Knightで飛び出した晁の前には、自身のISを纏っていたターニヤがいた。

見る限り所々に迷彩柄を施し、両手には大きな爪が2つあり、あれが主兵装であろう。

他にもミサイルポットが2門、大型レールカノンが1門、そして、最大の特徴は

「しっぽ？」

「そうよ！悪い？」

「いや、何だか可愛いと思ってね」

「か、可愛いってなによ！／＼／＼全く緊張感がないわね」

「ごめんね。それでどうする？直ぐに始めるかい？」

「そうね…私が瞬殺するのは目に見えているけど、とりあえず最後のチャンスをあげるわ」

「チャンス？」

「ええ、今この場で謝れば許してやってもいいわ。さあどうする？」

「断る」

「…それは私に勝てるから。それとも男のプライド?」

「両方あるけど、今はプライドの方が高いかな?」

「フン! そんなみみっちいプライドの為にボロボロになる事を後悔しなさい!」

互いの言いたい事を言い合って試合の合図が始まった。

『ではこれより、田島 晃VSターニャ・アジャイルの3組クラス代表決定戦を始める! 始め!』

試合開始の合図と共にターニャが突っ込んで来た。それを晃は回避してやり過ごす。

「いくわよー!」

「くっ!」

(マスター敵I Sの解析を始めます。少々お時間をください)

具体的にはどのくらいかかる?

(3分もあれば十分です)

わかったよ。次からは試合開始前から頼むぞ

(努力します。では…)

そう言つて、Space Knightのコア人格との通信は終わった。そう言つている間にもターニャの猛攻が続いた。大きな2つの爪を振りかざして晃に肉薄して

いった。

「ほら、ほら、どうしたの！避けているばかりじゃあ勝てないわよ！」

「くそー！」

「フルスキンのI Sだから期待していたけど、これじゃあ拍子抜けするわね」

「なら、こいつでどうだ！」

晃はブレードをコンバートして両手で持ちだした。しかし、ターニャは嘲笑うかの様に挑発してきた。

「そんなもので勝てると思っっているの？」

「どうかな？行くぞー！」

「ええー！来なさい！」

両者は接近して切り付けあった。時折火花が散る中切り合った。互いのS Eが減る時にターニャが離れて行った。

「それじゃあ、とっておきの行きますか！」

「！」

そう言うとターニャは四つん這いになり、まるで動物が狩りを始めるような目つきになった。

それは陸上最速の動物チーターが草食動物を見つけ臨戦態勢を取った時の様であり、

晃がガルムを構えた次の瞬間…

「消えた!？」

「こつちよー！」

「ぐはー！」

背中から大きな衝撃を受けて地面へ直撃を避けたがSEを50%持つていかれた。そして、Space Knightのコア人格から通信が入った。

(マスター。解析が終わりました。今のは彼女のワンオフ・アビリティ【単一特殊能力】ですね。今彼女は最高状態になった模様です)

ワンオフ・アビリティってそんなに出来るものなの？

(いえ、既にセカンドシフト^二次^次移行^行を済ませているので、容易にできることです)

そうなのね…それで勝てる見込みはあるんだよね？

(残念ながらそれは0です)

え!?!じゃあどうすればいいんだよ…

(マスターと私が最高の状態になればセカンドシフトに移行し、ワンオフ・アビリティをつかえるはずですよ)

なら、Space Knightお前のマスターとして命じる。これからもずっと傍に居てくれるか？

（私はあなたのI Sです。フォーマツトされるまで何処にでも、どんな時でもお傍にいます）

たとえ僕の目的の宇宙に行けなくなってもか？

（ええ、ずっと傍にいます）

なら、安心したよ。それじゃあ行こうか！

S p a c e
相 K n i g h t
棒

（ええ！どこまでの駆け抜ける騎士として！）

晃のS Eが残り20%となりダメージ判定がB+まで行った時である。ターニヤの攻撃が止まった。

「いい加減降参しなさいよ！」

「いやだね…、諦めが悪いたちなんでね」

「…そう。なら、そのI Sごと粉々にしてあげるわ！」

そう言つて、再び四つん這いになって突進する構えをした。それに対して晃は落ち着いていた。

「これで最後よ！」

「S p a c e K n i g h t 僕に力を！」

その瞬間、アリーナ全体を覆う光がS p a c e K n i g h tから発せられた。

たまらずターニヤや他の人は目を塞ぎ収まるのを待った。そして、そこにはブレードからマントまで全て黄金色に輝くI Sが鎮座していた。

ターニヤや会場にいる生徒のみならず、千冬やロゼッタ、更には整備主任のライラまでもが驚かされた。

当然この男も例外ではない

「な、何だよあのI Sは！」

「落ち着け一夏」

「これが、落ち着いていられるかよ！何だよあのI Sの力は！」

「何処かだ？私は晁が自分自身の力で切り開いた力だと思うが」

「けどよ箒……」

「今は黙って観ておれ。もしかしたら次のクラス対抗戦で戦うことになるのかもしれないぞ」

「……」

そう言われてしまったら、黙るしかない。会場ではターニヤが啞然としていた。

「な、何よそのI Sは」

『わからない……けどこれならわかる。僕は君に勝って宇宙へ行くんだ！』

「減らず口を……いいわ！今度こそ終わらせる！」

そう言って、四つん這いになって突進して、晃の前で消えた。しかし、晃は落ち着いていた。そして、背中に向かってブレードを振った。

『そこだ！』

「キャー！」

『当たった！』

「どうして！どうしてなのよー！」

ISにはハイパー・センサーがある。これは、視覚補佐機能および各種センサー類の総称で、目視で全方位（360°）を見渡せる。

更に高速戦闘時において視覚情報の処理速度を向上させる機能もある。

晃はこのハイパーセンサーが飛躍的に向上され、ターニヤの速度に対応できたのである。一気に攻勢に出た晃はターニヤに向かって突撃して行った。

草食動物から、狩人に格上げになった晃は一気に仕掛けに行った。

しかし、この状態も無期限ではない。一夏のワンオフアビリティ〈零落白夜〉同様SEを削りながらの戦いになるので短期決戦をする必要がある。

行くよSpace Knight!

（了解！）

背中中のブーストを噴かせてターニヤに向かって行った。対してターニヤは大型レー

ルカノンを発射したり、ミサイルランチャーを撃ってきたが紙一重で躲されてしまった。

「ムキーン！当たり前なさいよ！」

『ごめんね。これで最後だ！』

「ひっ！」

ブレードを振り上げてとどめを刺そうとした瞬間、彼女の顔が恐怖の色に染まった。そこで晃は思った。

これじゃあまるでただ暴力をふるっており、彼女と同じ力にものを言わせているだけではないかと…

『それはダメだ！』

「え？」

晃は間一髪の所で踏みとどまり彼女の右手だけを狙った。右手に当たった彼女はSEが残り10%までとなった。しかし、晃の方が限界を迎えていた。

(マスター申し訳ありません)

どうしたの？

(…SE切れです)

え？

次の瞬間、Space Knightが解除されISスーツのみとなった晃が自由落下を始めた。

「うわー！！」

「田島！」「晃！」「晃さん！」「晃君！」「晃サン！」

千冬、箒、セシリア、あやめ、サーシャが同時に叫ぶが間に合わない。グラウンドに赤い一面が出来ることを誰もが想像していたが、思わなく事でことなきを得た。

「アキラー！！」

「うおつと！」

何とさつきまで戦っていたターニヤが落下寸前で助けたのである。これには助けてもらった晃が驚いていた。

「ターニヤさん？」

「大丈夫アキラ？」

「ええ、大丈夫ですよ」

「良かった。今降ろすわね」

そう言つて、ターニヤが優しく降ろして行つたが、思わぬ事故が発生した。なんとターニヤのISからプスプスと煙が発生しついに…

ボン！と音を立てて明後日の方向へ飛び出していったのだ。

「うわー！！」

「きゃー！！」

これには、ターニャと晃は驚いたき暴走したISを止めるすべは操縦者しかできない。晃はターニャに向かって止めるよう指示した。

「ターニャさん！今すぐISを止めるんだ！」

「無理よ！そうしたらアキラも無事じゃあ済まないわよ！」

「大丈夫！僕を信じて！」

「…わかったわ！」

そう言つて、ターニャはISを止めるよう念じた。そして、ISスーツになった状態になった。

しかし、2人は空中に居たため、落下し始めた。

「きゃー！ちよつと！どうにかしなさいよ！」

「分かつてる！」

この状況に晃はSpace Knightのコア人格を呼び出した。

Space Knight 応答してくれ！

(はい、マスター)

今から5分後に脚部だけ部分展開できる？

(可能ですか…)

ならやってくれ!

(し、しかし!そんな事したら、前みたいに昏睡状態になりますよ!最悪の場合…)
いいからやるんだ!

(…分かりました)

ありがとう。説教なら後でいくらでも受けるからさあ

(もう、私が怒れないことを知っているはずですよ)

そうだったね

それ以降Space Knightのコア人格から声は聞こえなくなった。恐らく準備しているのだろう。そして、徐々に地面が近くなってきた。

「ターニヤさん!僕につかまって!」

「けど…」

「良いから早く!」

「わ、わかったわ…」

そう言つて、晃は手をつなぐだけでなくターニヤを抱きかかえる格好になった。そして、地上まであと3mと迫った時に…

「脚部展開！」

晃の足にISの脚部が装備され逆噴射をし始めた。そして、徐々に降りてきて地上に降り立った時はターニヤをお姫様抱っこしている状態だった。

「もう大丈夫だよ。ターニヤさん」

「…う、うん／／／」

「ターニヤさん？」

「ふえ！な、何かしら？」

「もう大丈夫ですよ」

「そ、そう！ありがとうね／／／」

「い、いえ…だ、う」ドツサ

「え？ア、アキラ！ちよつと！しっかりしなさいよ！ねえ！」

晃は無茶な飛行をし続けたせいで倒れてしまった。辺りには、ロゼツタとあやめ、サーシャ、ライラが駆けつけて来たが倒れている晃には聞こえなかった。

こうして、3組のクラス代表決定戦は両者引き分けで終わった。

IS学園医務室。晃はここに来るのは2度目になる。但し今回は厄介な事になりそ

うだ。

まず、専用機であるSpace Knightであるが、オーバーホールまでとはいえないが検査の結果SE切れにより3日間の休養が言い渡された。

これは、整備科の方で対応する。問題はパイロットである晁の方だ。

最初のISの救命領域使用時は1日で元に戻ったが、次はそうはいかない。セカンドシフトへの移行、SEを枯渇させる程のワンオフ・アビリティ使用。

更にはSE切れによる強制使用により身体への負荷が異常なほどになっていた。これらの事から医者が出した答えは…

「ざっと見て3日間は昏睡状態に陥るでしょう」

「3日間ですか…」

「ええ。しかし、彼の身体能力を見る限り、今回は3日間ですが、改善されれば今後同じような事が起きても、1日で元に戻るでしょう。ですから今後は体力作りを中心とした訓練をする事をオススメしますよ」

「そうですか…ありがとうございます」

「正直、今後の事を考えるとこれ以上無茶な事はしないでほしいですけどね」

「ええ。けど、これは坊やが決めることだからねえ、大人の私達がとやかく言う必要はないと思うけどね」

「ミスロゼツタの言い分はもったもですがね…」

「ですが、ここはI S学園。彼がどれ程成長出来るか我々は、見守ることしかできなすすよ…」

「まあ、織斑先生世界最強そこまで言うなら対策はあるんでしょうな？」

「はい、今後は私とロゼツタ先生で彼のサポートを行うようにします」

「織斑先生もですか？しかし、弟さんはどうするのです？」

「なに、アイツならウチの面子が何とかするでしょう」

「そうですか…分かりました」

そう言つてI S学園で医者をしている女主治医、マリリン・シュナイダーは病室を後にした。

肩まで伸ばしている銀髪、深紅の双方、丸眼鏡と医者に不向きな格好をしているが青色のセーターで隠しているスレンダー体系を見れば10人中10人が女優と見間違えるほどの美貌を持っている。

しかし、そろそろ結婚適齢期に迫っており本人は内心焦っていた。

病室で眠っている晃を心配そうに見ているのは、ロゼツタだけではなかった。クラスメイトのあやめやサーシャ、それに対戦相手のターニヤまでもが心配そうに見ていた。

「晃君大丈夫かな…」

「あやめサン…」

「アイツなら大丈夫よ」

「ターニヤさん？」

「何たって私に勝った男なんだから…」

「そうだけどさあ…」

「だから、早く目覚めなさいよ。アキラ」

彼女達が見ている中、晃は静かに眠るのであった。

そして、クラス代表決定戦から3日後。晃は無事昏睡状態から回復する事が出来た。マリンからの許可も出たので、明日から通常授業に参加することが許された。

その事について一番に喜んだのは、あやめ達である。嬉しさの余り2人は抱きついて来たが回復したばかりの、晃は受け止める事が出来ず尻餅をついてしまった場面があるとかないとか…

そんなこんなでうやむやになっていたクラス代表は…

「というわけで、3組のクラス代表は坊やに決まったからね〜よろしくね〜」

『おめでとう!』

「いやいや、待って下さいよ。どうして僕なんですか? 代表戦では負けましたよね?」

「それはね『アタシが辞退したからよ』うーん」

「ターニャさん？」

「アキラの戦いは見てて危なっかしいところがあるからね。アタシが直々に訓練して！
S学園最強にしてあげるわ！」

「いやでも…『それに！』うう…」

「あ、アタシを負かしたんだから最強になりなさいよ！／＼／＼」

「う、うん」

ターニャがデレた…あのターニャが…と、教室のあちこちから聞こえてくるが本人は知らぬ存ぜぬである。

「いいかしらく兎に角坊やには3組の代表として、来月のクラス対抗戦で頑張ってもらわないとね〜」

「そうですか…皆の期待に応えるよう全力で頑張ります！」

『パチパチパチパチ』

教室から割れんばかりの拍手が起こったので、嫌われた様子が無くてほっとしている晃であった。その後、1人では大変だと思い副代表としてターニャが選ばれた。本人はまんざらでもない表情をしていた。

昼休み。3組の代表になったことを晃は箒とセシリアの2人に報告した。2人は祝

福し「いつか手合わせをさせて欲しい」とまで言われたので、「いつでもいいですよ」と返事をしていた。

逆に1組の代表は一夏に決まったことを晃に伝えた。どうやら、経験の不足している一夏を鍛えるところの事だが、正直、晃にとつてはどうでもいい事だった。

「そう言えば、晃さんは今日の放課後予定がありますか?」

「僕ですか?特に予定はないですね」

「でしたら、1組で一夏さんのクラス代表就任式のパーティーがあるのですがいかかですか?」

「ごめん。遠慮しておくよ。3組の僕が行っても迷惑だろうし」

「そうでしたか…」

セシリアが織斑の事を名前呼びにシフトチェンジしていた事に関しては、触れないで話題は3組の話になった。

「そう言えば晃とクラス代表戦で戦っていた子なんだが…」

「ああ、ターニャの事?」

「…呼び捨てとは、随分と親しい間柄になったのですね」

「まあ、あの後本人から言われたからね」

「そうでしたか…」

「？セシリアさん？」

「でしたら、わたくしの事も『セシリア』と呼んでくださいまし！」

「流石に他のクラスの人を呼び捨てることはできな「箒さんは呼び捨てですけど…」う
！」

「それとも、わたくしの事がお嫌いなのですか…？」

「はあくわかつたよ。セシリア。これでいいかい？」

「！ええ、これはこれでいい気分ですわね／＼／」

若干頬を赤く染めているセシリア。その横で箒が羨ましそうに見ていた。と、そこへ
件の織斑とターニャが来た。

「お、晃じやあないか！元気にしていたか！」

「…おかげさまでね」

「何だ？悩みがあるのか！だったら相談に乗るぞ。だって俺達友達だもんな」

「はあくこの前も言ったけど君と友達になった覚えもないし、別に相談事なんてない。
あつたとしても君には絶対に言わないから」

「硬い事言うなよ。俺達の仲だろう」

そう言つてまた肩を組もうとしたが、その手を叩き落としたのはターニャだった。

「アンタ聞いていた！アキラは馴れ馴れしい態度が気に食わないって言っているの！わ

かつたらなこれ以上ちよつかいをかけないでくれる」

「何だよ君は……」

「アタシはターニャ・アジャイル。3組の副代表よ」

「副代表？じやあ代表は誰だよ？」

「……僕だよ。試合をしていたんだからわかるだろう」

「うおーすげえな晁！」

そう言つて、背中をバシバシ叩いてきた。晁がやめる様に言つたが聞く耳もなたない状態だった。

「痛いよ！」

「ちよと、何やつてるのよ！」

「何つて祝つてゐるだけだが？」

「はあ……男つてバカばかりなの……」

「すまない。それについては一夏に非がある」

「そうですわね。一夏さんにはデリカシーと言うものが欠けていますわ」

「え？そんなのか？」

4人は「だめだこりや……」と心の中で思うであつた。そして、晁は箒とセシリアに別れを告げて食堂を出ていくのであつた。その後をターニャは追つていくのであつた。

放課後。1組が食堂で一夏クラス代表就任式を行っているので、3組は自身のクラスで、晃の就任式を行っていた。

ロゼッタ先生にも許可を取り、料理に関しては、食堂のおばちゃんが用意してくれた。そして、あやめの音頭で就任式がスタートした。

「それじゃあ晃君のクラス代表就任を祝って…乾杯！」

『乾杯〜！』

コップにはジュースやテーブルにはお菓子などが所狭しと並んでいた。晃も例外ではなくパーティーを楽しんでいた。自分の事を祝ってくれているクラスに心から感謝をしていた。

皆で盛り上がっているところに黄色のリボンに「新聞部」と書かれた腕章をした眼鏡をかけた女の子が現れて、晃の前までやって来た。

「やあやあ君が噂の2人目の男性操縦者かな？」

「多分そうだと思います。貴女は？」

「私はまゆずみ 薫子かわるこ新聞部をしているわ。これ名刺ね」

名刺には「IS学園新聞部 代表 薫 薫子」と書かれていた。とりあえず、晃はここに来た事を探ねた。

「分かりました。薫先輩はどうしてここに？」

「実は、2人目の男性操縦者にインタビューしようと思ったんだけど、今時間とか大丈夫かな？」

「ええ、少しであれば大丈夫ですよ」

「ありがとうございます。それじゃあ、『クラス代表になって一言』おねがい」

「そうですね…：任された以上、全力で取り組んでいきたいと思えます！」

「何か硬いなあ。そこは「ハーレム王に俺はなる！」とかないの？」

「そんな事ないですよ」

「ええ！そんな…：晃くんってホモだったの？」

「それはあり得ないです。女性に興味はありますが、僕は夢が叶うまではそんな事はしないってことですよ」

「へえ、因みにどんな夢なの？」

「いつか、ISで宇宙へ行きたいと思っています。そして、言ってみたいんです「地球は青かった」って…：なんか、年老いたこと言ってみましたか？」

「ううん！そんな事ないよ！とても立派な夢だと思うよ」

「そうでしたか！ありがとうございます」

「じゃあ、その夢が叶うといいね」

「ええ、だからこそこの学園で多くのことを学んで宇宙に行きます！」

「それが目標ってなことで記事を書いとくね」

「お願いしますね」

そう言つて、薫子はメモしていた。最後にクラス一同で写真撮影をしてパーティーはお開きとなった。

薫子が帰り際に「整備室に寄つて行くといいよ」と言つたので、晃は整備室に寄ることにした。そこには、作業着姿のライラと先ほど纏つていたSpace Knightが待機状態で鎮座していた。

「ライラさん。これは？」

「ああ、君のISを整備していたんだよ。薫子はウチの整備部のエースだからね。あの子から直々に頼まれてね」

「ありがとうございます！」

「なに、君のISは整備の甲斐があるからね〜楽しかったよ」

「でも、これじゃあ持ち運べないですよね」

「それなら君が念じればISは自ずとその姿になるはずだよ」

「わかりました」

そう言つて、目を閉じて念じると晃の胸に三角形の青白いペンダントが現れた。これがSpace Knightの待機状態である。その証拠に晃が念じるとSpace

Knigh tのコア人格から思念通信がきた。

(マスター)

Space Knigh t! 元気だったかい?

(はい)

良かった。無茶させてごめんね

(大丈夫です。それよりもマスターにお願いがあります)

何だい?

(私の名前を決めてください。いつまでもSpace Knigh tでは呼びづら
いと思うので)

そうだね。わかったよ

そう言つて、ポツリと言つた

「::レイ」

「え?」

「ああ、何でもないですよ」

(::レイですか。了解しました。なら、「レイ」で登録しておきます)

うん。けどそれでいいのかい?

(いいも何も、マスターが考えた名前です。私はそれに従います)

ありがとう。これからもよろしくねレイ

(はい。マスター)

こうしてSpace Knight改めレイをパートナーとして晃はライラから受け取り自室に戻って行った。そして、シャワーを浴びて次の日に備えるのであった。

次の日。晃は当面の課題として、体力作りを第一に考えたトレニングを行った。

外周のランニングも増やし、筋トレも負荷をかけた。そして、食堂では高たんぱく、低カロリーを基本としていった。

授業が始まるとロゼツタ先生から思いがけない事を聞かされた。

「今日のIS授業は一組と合同で行うから準備しておいてね」

それだけを残して本人は教室から出て行った。晃は(あの織斑と一緒になるのか…)と思うと胃が痛くなってきた。

とわいえ、これはチャンスでもあった。一組の奴らに自身のIS技術を見てもらい、アドバイスを受ける事もできるかもしれない。そう思うことにした。

そして、IS授業。第一アリーナには1組と3組が一緒になっていた。3組は「あの織斑一夏に会える」と喜んでいたが、中には「晃君の方がカッコイイもんね」と言ってくる子もいた。

そんなやり取りをしていると千冬のから前に出て来るように指示があった。

「それでは、これより1組と3組の合同IS授業を始める。初めに名前を呼ばれた者は前に出る様に。オルコット、織斑、田島、アジャイル！」

『はい』

「4人には、ISの展開及び飛行実地を行ってもらう。まずはオルコット。熟練したIS操縦者なら展開までに1秒はかからないはずだぞ」

「はい、では晃さん♪」

「ああ、頑張ってる」

「ウフフ／＼／」

そう言ってる、セシリアは左耳にある左耳の蒼いイヤークラスに触れた。その瞬間「ブルー・ティアーズ」を纏ったセシリアが浮遊していた。

「タイムは0.5秒でした」

「よし。次織斑」

「はい、…あれ？」

一夏は右腕の白いガントレットを前に出しても変化はなかった。痺れを切らした筈は一夏に向かって激を飛ばしていた。

「どうした一夏！」

「ええっと……こい白式！」

やっとのことで展開した一夏であったが、余りにも酷い結果に千冬から怒られてしまった。

「ええっと…織斑君の時間は2秒でした」

「遅すぎる！これでは戦う前にやられてしまうぞ」

「けど千冬姉「織斑先生だ！」はい、織斑先生…」

「次回までには1秒を切る様に。次田島」

「はい」

そう言つて、晃は胸にある三角形の青白いペンダントを握つてISを展開するのであつた

行くよレイ

(はい、マスター)

そこには、クラス代表戦で纏つていたIS「Space Knight」がいた。

「田島さん…凄い！0.3秒です」

『え！』

この結果に全員が驚いた。あの代表候補生セシリアでも0.5秒かかる展開を0.3秒でやってのけたのである。

しかも晃は代表候補生でもないただの一般生徒である。この結果に千冬とロゼッタ

は今後どうすればいいのか考えていた。

「よし、最後はアジャイル！」

「はい！」

ターニヤのIS【チーター】の待機状態は動物の鉤爪状のもので、セシリア同様触れた途端ISを展開していた。

そこには、所々に迷彩柄を施し、両手には大きな爪が2つ、ミサイルポットが2門、大型レールカノンが1門、そして、キュートなしっぽが付いていた。

「アジャイルさんは0.5秒でした」

「よし、全員ISを展開したな。それでは次に飛行実地を行ってもらおう。4人とも飛べ！」

千冬の合図を基に4人はアリーナの空に飛び出した。セシリア、晁、ターニヤ、そして一夏の順番であった。この順番に不満だったのが千冬である。

『こちら織斑どうした！スペック上ではお前が一番上なんだぞ』

「そう言われても…円錐が飛んでいるイメージって言ってもな…」

「イメージは所詮イメージですわ。自分自身に合ったイメージを模索することが大事ですわよ」

「そう言ってもなあ。なあ晁はどうなんだ？」

「…知らないよ。それに分かっているても教える義理はない」

「そうよ。自分自身で探さないこのバカ！」

「ば、バカはないだろ！」

「…やめなよ2人共。ほら、織斑先生がこっちを見ているよ」

そう言つて、ISのハイパーセンサーで覗くと、千冬が鬼の形相でこちらを見ていた。どうやら先ほどの会話が筒抜けであつたようだ。

『織斑とアジヤイには後で話がある。覚悟しておくように。それでは、最後に着地の練習だ。田島を除く3人には地上10cmの上で止まってもらう。先ずはオルコットからだ』

「はい。それではお先に失礼しますわね」

そう言つて、セシリアは晁にウイंकをして地上へ向かつて行つた。これに関してターニヤはムキになつたが晁は知らなかつた。

そして、見事10cmで止まつた。こちらに手を振ってくる余裕まで見せた。

「次、織斑」

「はい！行くぜ！」

一夏はミサイルの様な姿勢を取つて地面に向かつて行つた。当然止まるタイミングを見誤つておりブレーキをする前に激突してしまつた。おかげで地面には大きなク

レーターが出来てしまった。

「馬鹿者！地面に穴を開けてどうする！」

「すみません……」

「次の時間までに直して置け！次アジャイル！」

「はい！いくわよー！」

ターニヤに関しては、キッチリと10cmの前で止まることが出来た。流石代表候補生の事はある。そして、最後に晃が残った。そこで千冬は思いがけない課題を出してき
た。

「最後は田島だな。そうだな、田島にはイクニツシヨンプースト瞬間加速をして地上5cmの所で止まってもら
うか」

『えー！』

「無茶ですわ織斑先生！」

「そうですよ。晃はISを動かしてまだ2週間しかたっていないんですよ！」

「そうか？けど当の本人はやる気だぞ」

セシリアと箒が庇うなか、晃はレイと思念通信をしていた。

どう思う？

(無茶苦茶すぎますね。どう考えてもマスターの事を試している感じがします)
だよねくけど…

(マスター?)

チャレンジはしてみたいよね!

(はあく分かりました。それならサポートは任せてください)

ありがとう

そう言って、レイとの思念通信を終えるのであった。

「織斑先生、一つお願いがあります」

『何だ?』

「もし、成功したらISの訓練に付き合ってもらえますか?」

『いいだろう』

「え! どういう意味だよ千冬姉!」

「そのままの意味だ。それに今は織斑先生だぞ」

「くっ!」

恨めしそうに一夏が睨んできたが今はそれどころではない。千冬とのIS訓練が出来るだけでワクワクして来た。その気持ちを抑える様に晃は地面に向かって行った。

「行きます！」

背中のパワーニア2門からエネルギーを放出し、爆発的に加速して行った。

凄いGだ！けどこれならいける！

(マスター地表まであと1mです)

分かっている！

そして、地表まであと50cmというところで両足のパワーニアで逆噴射を掛けて地表まで5cmの所で止まった。

これには、1組、3組のメンバーから拍手が起こった。ただ一人悔しそうな顔をしている一夏を除いて…

「凄い！凄い！晃君！」

「ええ！ホントにそうですね晃サン！」

「ふ、フン！やるじゃない！流石私が認めた男だけあるわね／＼／＼」

「流石は坊やだね」

「素晴らしいですわ晃さん！」

「うむ！」

「みんなありがとうございます」

しかし、千冬は1人考え込んでいた。

（おかしい。あの技は代表候補生でも至難の技なのにいとも簡単にやつてのけた。田島晃。奴は何者なんだ…もしかしたら、奴なら果たしてくれるかもしれないな。アイツとの約束を…）

「それでは、今日の授業はここまでとする。なお、織斑はグラウンドを元に戻してくよう
に」

「ええ！頼む晃手伝って「断わる」そんな〜」

泣きじやくる一夏を尻目に晃達はグラウンドを後にした。

そして、その夜…

「ここがIS学園ね。待ってなさいよ！一夏！」

このIS学園に小龍が舞い込んでくるのであった…

第2章 謎のISとクラス対抗戦

第4話 クラス対抗戦〜前編〜

1組との合同授業が終わった放課後。晃は自室へと戻っている途中に、総合案内所に1人の女子生徒がいた。

栗色の髪をツインテールにし、肩だしIS制服にカスタマイズした子は、どこか嘆いているように見えた。

「あくもう！職員室ってどこにあるのよ……この学園広すぎ〜！」

別に無視しても良いかと思っただが、後味の悪い事になりそうだと思い、晃は助けることにした。

「どうかしましたか？」

「あ、ちよつといい？職員室の場所を知りたいんだけど」

「ああ、それならここから反対側の方にあるから案内しますよ」

「ありがとう〜！私凰ふあん 鈴音りいんって言うのよ。あんたは？」

「僕は田島 晃と言いますよ。凰さん」

「鈴でいいわよ。他の人もそう言っているし」

「では、鈴さんで」

「まあそれでもいいわ。それよりも晃って2人目の男性操縦者かしら？」

「その認識で合っていると思いますよ」

「そうよねえ、アタシも一夏が動かしただって知って大慌てしたもん」

「…織斑と知り合いなの？」

「ええそうよ。一夏とは幼馴染なのよ」

「…そうなんだ。着いたよ。ここが職員室になるよ」

「そう、ありがとうね。それじゃあまた明日ね」

そう言つて鈴は職員室の中に入って行くのであった。それを見送つた晃は自室に戻つてシャワーを浴びたが、頭の中ではモヤモヤしていた。

晃には親しい友人がいない。それこそ、最も信頼できる人はIS学園に入るまでいなかった。

転生してから極力関わらないようにして来たからだ。だから、一夏に鈴の様な幼馴染がいる事に、少しだけ嫉妬してしまった。

「…幼馴染か」

考えても仕方ないと思つた晃は、考えるのをやめて寝ることにした。

次の日。昨日約束した通り、ISの特訓を千冬と行うためにISスーツを着て第4ア

リーナに来てみると思いもよらない人がいた。

「あれ、箒？」

「おはよう。晃」

「おはよう。珍しいね、箒がここにいるなんて」

「ああ、千冬さんが特訓に付き合うなんて滅多にないからな。それに、戦い方を少しでも近くで見たいからな」

「そうなんだ。ところで織斑は？」

「一夏なら、多分寝ているんじゃないか」

「…そっか、アイツの事だから邪魔しに来ると思ったよ」

「無理もない。千冬さんから師事を受けるなんてないからな」

「そうだよな。この機会を最大限に活かすようにするよ」

「来たな。田島」

「織斑先生、朝早くからありがとうございます」

箒と雑談している時に、ジャージ姿の千冬が現れた。手には2本の竹刀が握られていた。

「これから特訓を始めるが、初っ端からISを使った訓練は出来ない。そこで、お前の実力を知るために少し打ち合ってもらおう」

そして、2本の竹刀の内1本を晁に投げると、千冬は正眼の構えをした。晁はどれくらいか分からなかったが、とりあえず千冬と同じ構えをするのであった。

「よし、構えは様になっているな。何処からでもいい。遠慮なく打ってこい」

「それじゃあ、行きます!!」

それから1時間費やしてたつぷりと打ち合いをしていた。途中、晁が倒れてしまう場面があつたが根をあげることなく、最後までやり切つた。

そして、朝食まで30分となつた時に1日目の訓練は終わつた。晁は終わる頃には汗だくで地面に大の字に倒れていた。

「田島。これからは、この特訓もトレーニングメニューに加えておけ」

「ハア、ハア、は、はい…わかり、ました…」

「なに、最後まで全力でやってのけたのだ。それだけ疲れるのは当たり前だ」

「そう、ですかね…」

「ああ、アイツも最初はこんな感じだった。それに比べればお前の方がマシな方だ」

「…ありがとうございます」

「うむ。精進しろよ」

そう言つて、千冬と箒は出て行つた。晁は自室に戻つてシャワーを浴びるのであつた。

く千冬・箒sideく

「篠ノ之。田島は剣道の経験はあるのか？」

「え？さあ、初めてだと思ってます」

私は、自室に帰る途中に千冬さんに聞かれて曖昧な事しか言えなかった。

「今日訓練してわかった事だが、田島は初心者ながら、私の型をして来た。しかも今日は初日だから軽めにしたが、苦しいとか言っていない」

「晁もここに来てから日々体力作りに励んでいましたからね」

「ほう？何だかずつと傍で見ているような言いぶりだな」

「な、なんでもないですよ！／＼／＼」

「まあ、田島はモテそうだからな」

「え!？」

「どうした？田島がモテては不味いのか？」

「そ、そんな事ないですよ」

確かに晁は一夏と違って日々努力しているように見える。しかし、焦っているような感じがしていた。

だが、アイツは3組だから、直接的なアドバイスは出来ない。だから、遠くで見守る

しかないかもしれないな…

く千冬・箒side outく

朝一の特訓を終えてシャワーを浴びた晃は制服に着替えて教室に向かっていた。時間的に朝飯は無理と判断して、ゼリーとカロリー〇イトで済ませてしまった。そして、続々とクラスメイトが集まって来た。

「おはよう。晃君」

「おはようございマス。晃サン」

「おはよう。アキラ」

「おはよう、みんな」

「見てたわよ。織斑先生との特訓。アンタ日本の剣道なんて出来たのね」

「そんな事ないよ。ただ織斑先生の型を真似しただけだからね」

「それでも凄いよ！晃君」

「ハイ！流石晃サンデス」

「アハハ…ありがとうね」

そんな話を話していると、ロゼッタ先生が現れたので、3人はそれぞれの席に着いた。昼休み。いつもの様に4人で食事を取ろうと食堂に向かったら、先客が居た。

「お！晃じゃないか！」

「…」

「なあ、お前も来いよ！鈴が話したがっているんだ」

「…どうする？」

「入口に居てもしようがないでしょ。行きましょう」

「ですね」

「ハイ」

「はあくわかったよ」

晁はため息をつくど、仕方なく一夏達の席に向かって行った。そこには、鈴の他に箒、セシリアの姿もあった。

「どうやら晁達が来る前に、ひと悶着あったようだ。」

「で、どこまで話したっけ？」

「一夏！この女が幼馴染ってどういうことよ！」

「ああ、箒の事か？箒とは小4まで一緒だったらだろ？小5から中学校までは鈴と一緒にだったからな。だから、箒はファースト幼馴染。鈴はセカンド幼馴染ってことだ」

「ああ、そうことね」

一夏はそう説明したが、晁は（幼馴染にファーストもセカンドもあるのか）と疑問に思っていた。そして、鈴は晁達に向き合った。

「初めまして。中国代表候補生の凰鈴音よ。宜しくね」

「ジャマイカ代表候補生のターニャ・アジャイルよ。会えてうれしいわ」

「晁君クラスメイトの高橋あやめです。よろしくお願いしますね。凰さん」

「サーシャ言いマス。ヨロシクお願いシマス」

「初めまして。イギリス代表候補生のセシリア・オルコットですわ。以後お見知りおきを」

「篠ノ之 箒だ」

全員が自己紹介をしたのを確認したので、食事をする事にした。そんな中晁達はおもむろに立ち上がった。

「どうしたの？ 晁？」

「ごめんね、僕達食券を買っていないから、これから買って来るよ。先に食べていいから」

そう言つて、食券買ってくるのであった。晁はサバの味噌煮、あやめとサーシャはサンドイッチ。ターニャはハンバーグ定食にした。

そして、4人は鈴達のテーブルで一緒に食べていた。時折、一夏が話したがっていたが、鈴に邪魔されてそれどころではなかった。

昼休みも終わり、談笑していると話しは次のクラス対抗戦の話題になった。

「そう言えば一夏、アンタ一組のクラス代表になったんだって」

「そうなんだよ。おかしいよな、セシリアに負けたのにさあ」

「一夏さんは圧倒的に戦う機会が少ないですからね。場数を稼ぐためにもクラス代表になっていただいた方が、手っ取り早いと思ましてね」

「へえ、そうだったのね。じゃあ、3組は？」

「3組は僕だよ」

「そうなんだぜ！ 晁のI Sとっても強いんだぜ」

「…そんな事ないよ」

「へえ、ねえ晁。今度手合わせしない？」

「いいけど、その前に箒とセシリアからも言われているんだ。それが終わってからね」

「あらら、意外とモテるのね」

「晁君どういうこと！」

「晁サン！」

「アキラ！ アンタね私と言うものが居ながらそんな事していたの！」

「ええ！」

「この言い方に晁は驚くしかなかった。あやめとサーシャはよく一緒にいるから何となく、分かっていたが。ターニャにたっては、知り合って間もないのに、「晁は私の物

！」みたいな言い方をしてる。

「はあ、なら鈴さん。手合わせはクラス対抗戦の後で構わないかな？」

「ええ、アタシもいきなり言っただけ悪かったわ」

「なら、これで失礼するよ」

「じゃあ、また後でね」

「またなく晁く！」

最後に一夏が何か言っていたが、それを聞きく前に晁は食堂を後にした。そして、午後の授業が始まった。

IS学園にも、通常の高校と同じ5教科の科目がある。転生した晁にとっては朝飯前だが、サボるわけにはいかない。淡々と授業が進み、気が付けば放課後になっていた。

放課後は生徒会長との特訓になる。朝は織斑先生との特訓で基礎知識・体力作りを行う。放課後は楯無との特訓により応用と判断力を養う。

これは、ロゼッタ先生からのプランで晁様に組立られた内容であった。最短で強くなるにはこれくらいいいとけない。

晁は自身のIS【Space Knight】を纏いながら楯無からの攻撃を避けていた。

「ほらほら！逃げてばかりじゃあ当てられないわよ！」

「チィー！」

晃がいくら舌打ちしても相手は待ってくれない。ここぞとばかりに攻撃をしてくるので、避けるので精一杯になってしまう。また、ある程度距離を離してもすぐに追いついてくる。それでも晃は反撃の隙を伺っていた。

「そこだー！」

「残念♪」

「グハ！」

「ほら、ほら、私はここよ〜」

「…そうですね！」

「おっと」

「せい！はっ！とりやー！」

「お、とっ」

「もらったー！」

「甘いわよ♪」

寸前の所で躲されて空へ逃げた楯無。それを確認した晃も空へと飛んだ。

「そろそろ終わりにしようかしら」

「…奇遇ですね。僕もそう思っていましたよ」

「あら？何か秘策があるのかしら？」

「ええ、とっておきのがね」

「ふうくん。ならお姉さんも頑張らないとね」

「行きます！」

晃はその場から勢い良く上昇した。そしてレイを呼び出した。

レイ、いる？

（はい。マスター）

例のアレ、試してみるよ

（しかし、アレはまだ…）

わかっているよ。今回は試運転だから、全力で使わないよ

（本当ですか？時々マスターは嘘をつきますからね）

そ、ソナナコトナイヨ

（カタコトになっていますよ。：はあ、今回は大目に見ますからね）

レイとの思念通信を終えて楯無と再び対峙した。

「ねえ？何しているの？」

「ちよつとした作戦会議ですよ。それじゃあ行きますよ！」

「ええ！」

そう言つて、晁はある呪文を唱え始めた

『我は騎士、我は騎士団長、我は近衛騎兵、そして、我は世界を統べる王となる！刮目せよ！全知全能の王の姿を！』

そう言つと、以前の様に晁の I S [Space Knight] が黄金色の輝きを見せた。そして楯無に向かつて行つた。

「な、何よあれ！」

『行くぞ！』

「き、来なさい！」

『フン！』

「は、早い！」

『こつちだ！』

「え……きや！」

楯無は目の前に来た晁に攻撃を使用したのが、寸前の所で消えてしまい背中から攻撃を受けて、逆にダメージをおつてしまった。その後は晁の独壇場だった。

『セイ！ハア！ドリャア！』

「何で当たらないの!」

『フン!』

「キャー!」

「更識楯無SEエンプテイ!勝者田島晃!」

そして、楯無のSEが0になり特訓は終了した。ミステリアス・レイデイが待機状態に戻るのと同時に晃のISも通常モードに戻っていた。今回は倒れることはなかった。

「ちよつと!田島君強くない!」

「いや〜今回はこSpaceいKnighつのワンオフアビリティ性能を試したかったので、ちよつと力を出してしまいました」

「それでちよつとなの!」

『田島。遠慮することはない。こいつは前回の事があるから、遠慮する必要なんてなかったんだぞ』

「織斑先生?」

そこには、管制室でマイクを握っている千冬とマリンが居た。マリンは晃に何かあった時の為に待機していた。

『そうだ。そいつは、IS初心者のお前に大技を出したんだからな』

「織斑先生!」

「そう言えば、そうでしたね」

「田島君！」

「冗談ですよ。けど、これからは気をつけてくださいね」

「は、はい！」

これで楯無との訓練は終了した。晃はライラに整備を依頼すると、自室に戻ろうとしたが、その前に立ちほだかる人がいた。

「マリンさん？」

「元気で何よりだ」

「ええ、おかげさまで……」

そう言って、晃はマリンの横を通り過ぎようとしたが、捕まってしまった。

「ちよつと待て」

「どうしたんですか？早く帰りたいんですけど」

「田島、どうしてそんなに汗をかいている？」

「！」

「動悸も早いし、脈拍数も不安定だ」

「……離してください。大丈夫ですよから」

「大丈夫かどうかは、医者である私が決める。付いて来い」

マリンは有無を言わせることなく晃の腕を掴んで、保健室に引っ張って行った。そして、聴診器を当てて診察をし始めた。

「…フム。大分落ち着いて来たな」

「ですから、大丈夫だと言ったじゃあないですか」

「そう言っても、君は先のクラス代表決定戦で昏睡状態が3日間も続いたんだ。心配にはなるさ」

「…ありがとうございます」

「まあ、大分体力が付いてきたから大丈夫だと思うがね。念には念を入れてね」

「もう帰ってもいいですか？」

「ああ、引き留めてしまつて悪かつたね」

「いえ、それじゃあ失礼しました」

晃が保健室を出て直ぐにマリンは手元のカルテを見た。そのカルテには「田島 晃」と書かれており、晃が以前昏睡状態に陥った時に彼のカルテを作成していた。

しかし、そこには様々な不明な点があった。

(どうも気になる部分がある。彼は16だと言うのに、骨格、体の構造が成人男性その物の様に見える。加えて、あの異常なまでの疲労度だ)

マリンは様々な疑問を出てきたが、全ては憶測であり事実では無い。

「まあ、気長に待とうか」

そう言つてマリンは晁のカルテに『〇月×日異常なし』と記入して、保健室を後にした。

その日の放課後。楯無との冬との特訓が終わつて自室に戻る途中、ベンチに一人佇んでいる女子生徒がいた。

「あれは、鈴さん？」

「あ、晁……」

「どうしたんですか。こんな所で？」

「ちよつとね……」

「ふうん……風邪ひかないでくださいね」

「つて！ちよつと！話し聞きなさいよ」

「なんで？」

「心配じゃあないの！」

「……別に」

「……アンタ友達いないでしょ」

「……」

「何か言いなさいよ」

「ソナナコトナイヨ…」

「どうだか…」

結局晃は鈴の悩みを聞くために、自室に招待した。部屋にはこれといって無駄なものがなく綺麗に整っていた。

「案外片付いているのね」

「元々そんなに物を持ってないからね。とりあえずお茶でも飲みませんか？」

「いいの？」

「客なんだ。ゆつくりしてくれ」

「…ありがとう」

そうやって、2人分のお茶を用意すると晃は話すように促した。

「それで、どうしたんだ？」

「実は…」

話しを聞いた晃は呆れて物も言えない想いだった。話しを聞いてみると、一夏と鈴は小学校の時に『ある約束』をしていた。それは『大きくなったら毎日味噌汁を作つてあげる』の中国版で『大きくなったら毎日酢豚を作つてあげる』と言い約束した。

その話しを今日したら、思わぬことに解釈していた。何と、一夏は『大きくなったら毎日酢豚奢つてやる』と思っていた。これには鈴も怒らずにはいられなかった。そし

て、頬に一発入れて来た。

流石にこの話しを聞いた晃は

「あほくさ……」

「ちよつと！こつちは真剣に悩んでんのだよ」

「はあくだつたら言わせてもらいますよ。どうして、その時にちゃんと想いを伝えていなかったんですか？」

「そ、それは……恥ずかしかったし／＼／＼」

「その結果が今の状況じゃあないですか？」

「え？」

「僕が見る限り、大半の女性陣が織斑の事狙っているし、箒も何だか訳ありみたいだしね」

「うっ！」

「それに、例えばが悪すぎる。もつとストレートに言わないと」

「はあくそうよね……」

「……それで？どうするんですか？」

「そんなの……ちゃんとハッキリさせるわよ」

「へえ、何か手立てはあるの？」

「次のクラス対抗戦に勝ったら、勝者の言うことを何でも聞いてもらう約束をするわ！」
鈴はそう高らかに宣言した。その事を聞いた晃は「もう好きにやってくれ…」と投げやりになった。

そして、千冬と楯無の特訓を経て、迎えたクラス対抗戦。組み合わせによると1組と2組で行われて、3組は4組で行われる。対戦表には次の通りになっていた。

第一試合

織斑 一夏 VS 凰 鈴音

第二試合

田島 晃 VS 更識 簪

晃は4組の更識の文字に既視感を出した。

「更識？そう言えば会長の苗字も更識だったな。何か関係性があるのかな？」

「あちやく簪ちゃんね？」

「知り合いですか？」

「知り合いも何も、私の妹よ」

「そうだったんですね」

「ええ、けど簪ちゃんと仲良くなってね…」

「ふくん」

実際晃にも妹がいるが、仲は良い方だから、楯無の言葉がよく分からなかった。

そう言っていると、妙な視線を感じ振り返ってみるとそこには、楯無と同じ髪色だがメガネをかけており、明るい姉とは反対にちよつと暗いイメージがある女の子が柱の影からこちらを覗いていた。

その子は晃の事をジツと見ながら徐々に近づいて来た。

「……」

「えつと…更識簪さん？」

「…うん」

「僕に何か用かな？」

「…別に」

「そっか…」

「…うん」

「……」

「……」

ちよつとした沈黙が流れた後アリーナの方からワアアアア！と声が上がった。どうやら第一試合が始まったらしい。

晃は観戦しようとしてアリーナに向かおうとしたら、簪の姿はそこにはなかった。

「あれ更識さんは？」

「簪ちゃんなら、もう行っちゃたわよ」

「そうですか…」

「ほら、私達も行きましょう」

「はい」

そう言いつて、晃は楯無と一緒に向かうのであった。

アリーナの通路で楯無と別れて、クラスメイがいる場所へと向かった。あやめとサーシャは生のI Sバトルに興奮しており、ターニャに至っては代表候補生視点で分析をしていた。

「晃君どこ行っていたの？」

「そうですヨ。心配したんデスヨ」

「ごめんね。ちよつと迷っちゃって」

「それもいいけど、今いいところよ」

鈴のI S【甲龍】は第3世代型、近距離格闘型でパワータイプ+格闘と射撃の複合型であった。肩にある肩の非固定浮遊部位（アンロックユニット）に特徴的な棘付き装甲（スパイク・アーマー）を持ち、スライドした中に衝撃砲2門を両肩に装備している。

一夏は何とか鈴に近づこうとした。しかし、見えないところから衝撃が発生し一夏を

襲った。

「ターニャさん、あれは？」

「あれは、龍砲よ」

「龍砲？」

「ええ、龍砲はね簡単に言えば、馬鹿でかい衝撃力を持った空気砲よ」

「え？」

「空間自体に圧力をかけて砲身を生成するのよ。だから、砲身も砲弾も眼に見えないのが特徴よ。その上、砲身斜角がほぼ制限なしで撃てるわ」

「凄いねターニャさん！」

「ふ、フン／＼／＼このくらい、代表候補生にとつては朝飯前よ／＼／＼」

ターニャが詳しく説明している時に事件が起きた。一夏が鈴に斬りかかろうとした瞬間、アリーナのバリアを突き破るくらいのビーム光線が、グラウンドに落ちたのだ。

ドコーン!!

「何今の音！」

「バリアが破られた!?!」

『緊急事態発生！緊急事態発生！トーナメントは中止！来賓者は速やかに所定のシエルトーに避難してください。繰り返します…』

「僕達も避難しよう」

『ええ（ハイ）』

先ほどの攻撃を受けて、会場はパニック状態になった。かくゆう晃達も近くのシエルターに避難する為に移動しようとしたが、とんでもない事が起きていた。

「あれ！ドアが開かないんだけど！」

「そんな！開けて！」 ドンドン

「助けてー！！」

なんと、先ほどの攻撃でドアが開かなくなってしまうていた。仕方なく晃はロゼッタ先生に連絡を入れた。

「ロゼッタ先生、晃です」

『どうしたんだい坊や？』

「今、第四ゲートに居るんですけど、ドアが開か居ないんです」

『ちよつと待つててね…わかったよ。どうやらハッキングされているね』

「誰にです？」

『それはね…「ちよつと！アキラ、あれ！」』

「うん？」

ターニヤの声を聞いてアリーナの方を見るとそこには…

「何だ…あれは…」

そこには、黒いフルスキヤンの謎のISがいた。特徴としては、両腕は2倍近く大きく、ビーム砲が装備されている。また、顔には無数の穴が空いているが、腕や足の形、骨格までもが人間そのだった。

「フルスキヤンのISは見たことけど、ここまで不気味な奴は見たことないわ」

「ロゼツタ先生。何ですかあのISは？」

『うん…今こつちでも調べているけど、多分あのISが原因かもしれないねえ』

「そうですか…ならこのドアを破壊します」

「ええええ〜！」

「アキラそれ本気!？」

「ああ、それしか方法がないんだろう」

「でもね…」

「それに、こんな状況を一気に打開するにはこれしかないんだ。いいですねロゼツタ先生」

『こつちがダメだつて言っても聞かないんだろ坊やは…わかったよ』

「ありがとうございます」

『但し、戻ってきたら反省文10枚だからね』

「分かりました」

そう言つて、晃はSpace Knightの待機状態である、三角形の青白いペンダントを握つてISを展開するのであった。

行くよレイ！

(はい、マスター)

Space Knightを纏つた晃はドアから離れる様に指示した。

「皆さん下がつて！」

「貴方は？」

「一年三組田島 晃です。今からこのドアを破壊します」

そう言つて、両手剣を装備した晃はドアの前に立った。そして：

「フン!!」

バッキーン！

斜め上から振り下げられた剣によつてドアは真つ二つになった。それを確認した晃は「押さないでください！」と注意喚起をしながら、避難誘導をしていた。

「晃君凄い！」

「流石晃デス！」

「ありがとう。2人も早く逃げて」

『うん（ハイ）』

「ほら、ターニヤさんも」

「嫌よ！アタシは代表候補生。あのISを叩き潰すわ」

「…わかったよ」

そう言つて、2人は謎のISと一夏・鈴がいるアリーナに向かうのであった。

第5話 クラス対抗戦～後編～

謎のI Sと対峙している一夏と鈴。その瞬間もI Sからの攻撃は続いていた。

「クツソ！これじゃあ被害が拡大するだけだ！」

「一夏、ここは一旦出直しましょう」

「ダメだ！そうしている間にも被害が大きくなるだけだ…」

「でも、あたし達のS Eそろそろ限界よ！」

先のクラス対抗戦で戦っていた一夏達のS Eは4割を切っていた。このままではI Sを倒す前にこちらがやられてしまう。

「どうすりゃあいいんだよ…」

『織斑、凰聞こえるか』

『織斑先生！』『千冬姉』

『今教師陣が向かっている。それが過ぎたらお前たちは後退しろ』

「でも！そんなの待ってられるか！」

『織斑。これは、指示じゃない。命令だ』

「！」

一夏は姉からの声により萎縮してしまった。確かにこのままでは負けてしまう。そう思った一夏は潔くピットに戻ろうとした時である。

パリーーン！

突然アリーナのバリアが破れ2体のISが入って来た。1体は迷彩柄に両手には大きな爪が2つ。他にもミサイルポットが2門、大型レールカノンが1門、そして、しつぽが付いたIS。

もう1体は何処かの王族に使える近衛騎士みたいな感じのIS。全身を赤のカラーリングで染め上げ、胸の辺りに白い線が交差するようになっており、バーニア2門を覆う蒼いマント。両足にもバーニアが1門づつ付いており、手には両手剣が握られている全身装甲のISが現れた。

「鈴さん、織斑、加勢に来ました。2人は早くピットに戻ってください」

「あたしたちが来たからにはもう大丈夫だからね！」

「晃……」

「説明は後です。織斑を連れて、ピットに戻ってください」

これで、素直に戻ってくれば良かったのだがそんな事がないのが一夏であった。

「やめろ！あんな奴俺一人で十分だ！」

「一夏！アンタじゃあ無理よ！」

「…」

「見てろ！俺だって！」

自分の状況を素直に判断できない程、焦っていた一夏は謎のISに向かって行った。そして、ISが回転したことによる攻撃でやられてしまうのであった。

「ぐは！」

「一夏！」

そして、ビーム光線が一夏に向かって行ったが、晃がシールドを生成し防いでいた。

「や、やれる…」

ドーン！

「くっ…あれ？」

「…全く、バカの相手をすると疲れる」

『晃（アキラ！）』

「織斑。さっさと逃げろ。お前では無理だ」

「け、けどよ…」

「はあくならハッキリ言った方がいいか。足手まといなんだよ！今のお前は！」

「…」

その一言に一夏は黙るしかなかった。鈴は動かなくなった一夏を回収していくのであった。

「鈴さん。織斑の回収を頼みます」

『晃アンタはどうするのよ?』

「僕はあの I S を倒します」

『ハア! 無茶言わないで! 大人しく教師陣が来るのを待ちなさいよ』

「それは出来ません」

『だったら…』

「大丈夫。僕は織斑ほどバカじゃありませんから。ちゃんと引き際をわきまえていますよ」

『本当よね?』

「ええ、ですから早く退避してください」

『…分かったわ』

そう言つて意気消沈の一夏を回収し鈴はピットに戻って行くのであった。そんな中ターニャも戻つて来た。

「生徒達の避難は終わったわ」

「そうか…ロゼッタ先生！」

『ハア〜イ。どうしたんだい、坊や』

「奴の解析はどうなっています？」

『うんとね…あらかた終わっているよ〜』

「それで、奴は？」

『アイツはね“無人機”よ〜』

「無人機？」

『ええ、だから思いつ切りやっても問題ないわ』

「分かりました」

そう言って、ロゼッタとの通信を終了した。そして晃はレイと作戦会議をしていた。

レイ、いる？

（はい。マスター）

あのISを止める事は出来るかい？

（無理ですね。こちらかの信号を完全に拒絶しています。倒すにはコアを破壊するしかありません）

なら、コアの位置を特定できる？

（おまかせください。既に解析をスタートしています）

どれくらいかかるかい？

(あと数十分ほどかかります)

上出来だよ。引継ぎお願いね

(了解です)

晃はレイの解析結果が出るまで、ひたすら避ける様にターニヤに指示を出す。

「ターニヤ。今奴の弱点を検索しているから、それまで持ちこたえてくれ」

「分かったわ」

そう言って、2人は散開した。晃はレイン・オブ・サタディ×2丁でけん制しつつレイの解析を待っていた。

「そこだー！」

「喰らいなさいー！」

ターニヤもミサイルポットや大型レールカノンで応戦していた。そして、数十分が経ってレイの解析が終わった。

(マスター)

レイかい？どうだった？

(はい。解析結果が出ました。コアは胸部分10cm奥に装着しています)

そうか。それなら両手剣では厳しいね…

(はい)

なら、アレを使うしかないか…

(またですか…)

今回は全力で行うよ

(しかし!)

アイツを倒すなら、やるしかないんだ

(…)

頼むよ

(…分かりました。それなら使用時間を3分とします。それ以上はマスターの身体に負荷がかかりすぎますので)

ありがとう

(いいえ、これもマスターを守る為です)

ありがとう。助かるよ

そう言つて、レイとの交信を終えた。すぐさまターニヤに作戦を伝える。

「ターニヤ!」

「何よ!」

「今から3分間だけでいい。時間をくれないか」

「いいけど、大丈夫なんでしょうね」

「ああ、信じてくれ」

「…わかったわ。で、アタシは何をするればいいのか？」

「僕に攻撃が行かないようにしてくれ」

「OK」

「それじゃあ行くぞ」

お互いに話しをして、散開した。そして、晃は呪文を唱えるのであった。

『我は騎士、我は騎士団長、我は近衛騎兵、そして、我は世界を統べる王となる！刮目せよ！全知全能の王の姿を！』

そう言うと、晃のIS〔Space Knight〕が黄金色の輝きを見せた。この姿に学園の誰もが釘付けになった。

「何よアレ！あれがアキラのISなの！」

「すごい…」

「キレイデスね…」

「美しいですわ…」

「晃…」

「…カッコイイ／＼／」

「やっぱり敵わないわ。晃くんには」

管制室にいたロゼッタ、千冬、真耶も同様の反応をしていた。

「何だアレは！」

「凄く綺麗……」

「へえ、やるじゃない坊や」

ピットに戻っていた一夏も鈴木も例外ではなかった。

「何だよあのISは……」

「晃のISってあんな風になるのね」

この状態になっていて晃には全てがスローモーションに見える。例えば、目の前に向かってくるビームもハエが止まっているかの如くゆっくりに見えるのだ。

そのビームを避けて晃はISに向かってイグニッションブースト瞬時加速を決めるのであった。

『行くぞ！』

ビーム光線の間を縫うように晃は進んでいく。そして、両手剣で横一閃に切りつけた。

『フーン！』

しかし、踏み込みが甘く傷は浅くしか入らなかった。そして、バイザーには残り時間1分30秒の文字が出てきた。

『なら、これでどうだ!』

そうやって、晃はデザート・フォックス×2をコールし乱射した。そして、弾幕がある程度で来た時にガラムを取り出しISに向かって呐喊して行った。

『はあああああー!』

見事胸辺りに命中し一瞬のスキが出来た。そして：

『これで、終わりだー!』

再び両手剣に持ち直した。しかし、ただの両手剣ではなく刀身が赤く光っていた。

「何よアレー!」

いち早く反応したのはターニヤだった。そして、回転切りの要領で横一閃に振りぬくと謎のISは爆散した。

ドコーーン!

爆散したのを確認するとタイムが0になり、強制解除された晃はグラウンドに倒れこむのであった。

(マスター3分経ちました)

ああ、ありがとう…

ドサ!!

「アキラー!」

『晃くん!』

『晃サン!』

あやめとサーシャも心配になり、まだバリアが解除されていないグラウンドに向かうのであった。

そして、ここにも晃を心配する人たちがいた。更識姉妹の妹簪である。彼女は次の対戦相手なのでその情報収集に来ていたが、対戦相手が倒れてしまつて心配していた。

「…」

「見に行かなくてもいいのかしら?」

「…お姉ちゃん」

「あら、久しぶりに呼んでくれたのに、なんか怒っている?」

「…」

「まあ、そうもなるわよね。晃君をあそこまで痛めつけてしまったもんね」

「…」

「けど、今の晃君はすごく強いわよ。私でさえ危なくやられるところだったもの」

「…お姉ちゃんが?」

「ええ、簪ちゃんも戦つてみるとわかるわよ。彼の強さが」

「…」

「私は事態の收拾に向かうからね」

そう言って、楯無は管制室に向かうのであった。

爆散したISは直ぐさま回収され、学園側は事態の收拾を行った。当然クラス対抗戦は中止になり、簪と晃の戦いはまたの機会となった。

その後、IS学園のセキュリティ対策が行われたのは言うまでもない…

IS学園医務室。晃はいつも通りベットに寝ていた。違うという点は傍にはクラスメイトのあやめ、サーシヤ、ターニヤの姿がいる事だ。そして、マリンは今の状態を3人に告げた。

「…」

「晃君…」

「晃サン…」

「アキラ…」

「お前達まだ居たのか？」

「先生。晃君大丈夫なんでしょうね？」

「そうだな…今日はアレを使用したから、次にいつ目覚めるのはわからん」

「そんなに!」

「そうだぞ。アジャイルとのバトルでは3日間も寝ていた。今回はそれ以上の戦いだからな。いつ目覚めるかわからん」

「そんな…」

晃がいつ目覚めるか判らない。その事実はとても大きく、彼女達は少なからずショックを受けていた。だが、マリンだけは違っていた。晃ならこの状況を打破すると…

「お前達、そろそろ面会は終わりだぞ」

気付けば就寝時間ギリギリになっていた。それ程晃の事を心配していた証拠である。

「そうね…また来るわよアキラ!」

そう言って、ターニャ達は去っていた。マリンも心電図が動いて事を確認して医務室を後にするのであった。

次の日。相変わらず晃はベットで眠っている。その寝顔は苦しくなく穏やかであった。そんな医務室に招かれざる客が来た。

「うん…しよつと! やっぱりここのセキュリティへばだよな! 束さんなら、数時間で解読しちゃうよ!」

大きなうさ耳カチューシャをかぶり、不思議な国のアリスばりの服を着た女の人が現れた。千冬とロゼッタにも引けを取らない程のダイナマイトボディを惜しげもなくさらしている。

篠ノ之束。ISの生みの親であり、箒の姉である。細胞レベルで天才の彼女がここに現れたのはある目的を達成する為である。

「ふくん……この子がちーちゃんと言っていた2人目の子か」

晃が寝ていることをいい事に品定めをするような目で見る束。なぜ束がここに来たのは昨日の夜までに遡る…

IS学園地下室。ここには、晃によつて爆散した謎のISの破片が晒されていた。

「山田先生。謎のISの解析は？」

「それが、損傷が激しくパーツ一つ一つ調べていかないと何とも…」

「そうか…」

千冬は純粹に知りたかった。このISがどこから来たのか、どんな目的があつたのか、そして、なぜIS学園のセキュリティを突破で来たのか…

「山田先生すみませんが、引き続きよろしくお願いします」

「はい、分かりました」

そう言って、千冬は地下室から出て行くのであった。そして、ある番号を呼び出しコールした。

く???
く

とある国の海上。そこに鎮座していたニンジン型の宇宙船【吾輩は猫である号】にダース○イダーの着メロが鳴ったスマホを束は、周りの部品が散らばろうがお構いなしに飛び込んだ。

「この着メロは！はろはろ！あなただけのアイドル束さんだよ」

ブチ

悪ふざけをしたのか、千冬はスマホを切ったが直ぐに束がかけ直した。

「もく照れ屋さんだねくちーちゃんは」

『次やったら、一生かけないし着信拒否にするぞ』

「めんごめんご！それで何で電話してきたの？」

『お前に聞きたいことがあってな』

「うにゆ？」

『単刀直入に聞く。今回の騒動にお前は絡んでいるのか？』

「…何のことかな？」

『そうか…わかった。アイツが目覚めたら聞いてみるか』

「あれ？ じっくりくんがやつつけたんじゃないの？」

『いや、別の奴が倒したぞ。しかも、ISが爆散するほどの力を使ってな』

「…ふうん」

『何か企んでいないか？』

「べつにつに〜」

『はあ、兎に角変な事だけは起こすなよ。ただでさえこのくそ忙しい時に…』

「もちのろんだよ〜」

『…偶には妹に連絡してみたらどうだ？』

「今はそんな時じゃあないよ…いつか連絡するけどね」

『そうか…それじゃあ切るぞ』

「あくまっつて！ その子の名前は「ブチ」ちえ〜」

〜東side out〜

そして、東はその話しを確かめるためにIS学園医務室に忍び込んで晁の事を探りに来たのである。東は晁の持っていたISに触れようとした瞬間、誰かの手によって拒まれた。

「…だれ、ですか…」

それは、まだ虚ろな目を開けていた晃であった。その手は本来の力を発揮できずフルと震えていた。束はすぐ

に振りほどけば取れるが、そのISを取ろうとはしなかった。

「あれ？大天災東さん知らないんだ？」

「…ええ」

「うーん、そっか。君名前は？」

「…田島 晃です」

「そっか！なら、アツキーでいいか！アツキーはこのISを使つてなにがしたい？」

「…ぼくは、宇宙に行きたい」

「！」

「そして、みてみたい…ちきゆうのいろを…」

そこで、晃の意識が途切れた。晃の夢を聞いた束は純粹に知りたいのと、この先どうなるのかを楽しみしていた。

「そっか…なら、アツキーの夢応援するね！」

そう言つて、束はある薬を晃に飲ませるのであった。

「大丈夫だよアツキー！今は眠いけど起きたら、こんなことはもうないからね♪」

その薬は、疲労回復、滋養強壮に冷え性やその他もろもろに効く薬で、あの呪文を発動させる晃にはもってこいの薬である。

しかも、定期的に摂取することではなく一粒で事足りる代物だ。だが、副作用がある。それは…

「うん？ 田島目が覚めたのか？」

「…マリン先生…誰れかいましたかここに？」

束との会話の内容を忘れていたことである。

第3章 2人の転校生とタツグマツチトーナメント

第6話 2人の女神

クラス対抗戦は謎のISの乱入により、中止となった。あれ以来晃の体力は衰えることはなくなった。そんな晃はある夢を見る様になっていた。

それは、晃が神戸博として生きていた時の夢である。

「おーい博、今日の講義だるかったよなあ〜」

「そうかな？結構ためになる、事ばかりだったような気がするよ」

「あく出た、出た。さすが優等生の博さんは言うことが違いますね〜」

「茶化すなよ」

大学時代気の合う友人と、話していると目の前に1人の女大生が現れた。どこか大人しそうな雰囲気です丸眼鏡に教科書などを、入れる袋を持ちながら、もじもじしている子がいた。

「あ、あの！」

「うん？」

「神戸君ちよつといいかな？」

「ああ、大丈夫ですよ。古賀さん」

そう言つて、彼女古賀千春こがちはるさんは、博の傍に寄つて来た。だが、それを阻止する人が現れた。

「あら〜千春。抜け駆けはなしよ〜」

「…エリカさん」

彼女は三枝エリカ。アメリカ人の母と日本人の父を持つ、ハーフである。金髪にダイナマイトボディと色気をムンムンに惜しげもなくさらし、虜にして行く。そんな彼女も博に用があつてきた。

「ねえ〜博。ここ分らないんだけど〜」

「ん?どれどれ?」

そう言つて、自慢の胸を博の右腕に当ててきた。それを面白くないと思つたのは、先ほど聞いていた千春であつた。

「う〜あ、あの!神戸君私もここ教えて欲しいんだけど!」

「ん?」

千春は反対側の腕に抱きついて来た。それを面白くないと思つたエリカは、更に密着して来た。

「それで〜ここなんだけど〜」ムニユン!

「わ、私もここがちよつと／＼／＼フニ

両手に華とはこの事である。しかし、博はそんな状況になつても、冷静でいた。

「ああ、ここはね〜」

「…」

「…」

そんな素振りを見せる博に対して、面白くないと思つたのは彼女達である。せつかくアピールしているのに、見向きもされないと面白くないのである。

そんな中、先ほど話していた友人である、古川ふるかわ聡さとしは彼女たちの為に助け舟を出すのであつた。

「な、なあ博ちよつといいか？」

「うん？どうした？」

「お前さあ、ぶつちやけ聞くけど、好きな女の子のタイプとかないのか？」

『ナイス（です）！』

「また、唐突だな。そうだなあ……考えた事ないかも知れない」

『え！』

「それはなんで？」

「う〜ん…」

「まさかお前ゲ「それはない」さいですか…」

「そうだな…今まで宇宙の事しか考えた事ないから、異性には見向きもしなかったな」

「えゝそれは、男としての尊厳を失っているかもしれないぞ…」

「そんなことないぞ。独身でも成功する人がいるし、何より彼女よりも研究に没頭している時が好きだからね」

「アハハ…」

そう言つて、聡は博の腕に引つ付いている千春とエリカを見ていた。その顔は、まるでお通夜状態で目にハイライトがなかった。

「それで、答えは充分か？」

「あ、ああ。悪いな」

「それよりも古賀さんと三枝さんもいいかな？」

『ア、ハイ…』

「ありがとう。それじゃあね」

そして、博は2人を振り払つて家に帰るのであった。その背中を見ていた2人は決意を新たにするのであった。

『決めた（ました）！』

「うお！」

「…私、神戸君が振りむいてくれるような女の子になって見せます！」

「フーン！アంతアみたいになちんちくりん、博は相手しないわよ。見てなさい、私が彼を物にしてみせるわ！」

そんな2人の乙女による博争奪戦が勃発していた。なお、博はその3日後に田島晃として、ISの世界に転生するのであった。

「…朝か…随分と懐かしい夢を見ていたな」

ここは、博が通っていた大学時代の部屋ではなく、ISを起動した晃に与えられた個別の部屋である。束から投与してもらった薬により以前よりも、疲れることはなかった。

そんな彼だが日課のトレーニングを欠かさず過ごしていた。今日も、千冬とのトレーニングを行い自室に帰っていく途中に1人の女の子と出会った。

その女の子は、銀髪碧眼でクラスの女子よりもスタイルがよく、見目麗しい容姿だった。そんな子が晃に話しかけてきた。

「久しぶりね」

「…あのどこかでお会いしましたっけ？」

「私のこと覚えていないの？」

「すみません…」

「そう…」

その子はなぜか寂しい顔をしていた。そして、晃が何かフォローしようとしたら、後ろから来た人に邪魔されてしまった。

「あらくあの時の人間じゃないの？」ポイン

「！」

「ちよつと！」

「久しぶりじゃない？元気にしていたかしら？」

「…すみません。退いてもらいますか？」

「あら、つれないわね。けど、そんな所も可愛いわよ」チュ

「な！／／／／」

あろうことか、後ろから抱きついて来た金髪でダイナマイトボディを惜しげもなく当たって来た人は、晃の頬にキスを

して来た。

そして妙な事を言ってきた。

“あの時の人間じゃない”

この事について晃は必死に考えたが、結局分からず終いで終わってしまった。

「失礼ですが、どちら様ですか？」

「ああ、ごめんなさいね。私は天宮あまみや 空そらと言うわ」

そう言つて、銀髪碧眼の空は自己紹介をして来た。

「私は、四條しじょう 鏡花きようかてい言うわよくよろしくね」 チュ！

投げキッスをしながら金髪の鏡花は自己紹介をして来た。そして、晃はさっきの疑問を聞いてみた。

「田島晃です。そう言えば、さっき言つていた『あの時の人間じゃない』つて言うのは、どういう意味なのかな？」

自分が転生者なのは、転生させた女神しか知らないはず…それなのに、この人達は全てを知っているような口振りである。

「それはもちろんわ 「ダメよ！」 んもうつれないわね」

鏡花が喋ろうとした時、空が慌てて止めに入った。そして、2人で隅に行き何やらぼそぼそと相談していた。

「ちよつと！何喋ろうとしているのよ」

「えくだつてこれはもう言つてもいいんじゃない〜」

「ゼウス様からは『余り干渉するな』と言われていたでしょ！」

「ああ、あのエロじじいね。やっと天界から出てこれたのに……」

「全知全能の神をエロじじい呼ばわりとか……」

「だつてさ……この前なんか私が水浴びをしている所に入つて来ようとしたのよ……」

「え……」

「おかげで、ヘラ様に変な目で見られたわ……」

「そ、それは……ご愁傷様ね。兎に角彼にはまだ、打ち明ける必要はないと思うわ」

「そう……?」

「ええ、然るべき時に私から、話すわ」

「ならいいけれど……私が彼を盗つても文句言わないでよね」

「ちよつと! それ、どういう意味よ」

話し終わった2人は晁の元に戻ってきた。

「ごめんなさいね……ちよつと勘違いしちゃっていたわ……」

「……本当ですか?」

「ええ、申し訳なかったわ」

「ならいいですけど……あ!」

「どうしたの?」

「そろそろ、朝食の時間なのですみませんがこれで失礼しますね」

そう言つて、晃はダツシユで自室に戻りシャワーを浴びて食堂に行くのであつた。その姿を見て、鏡花と空はふと思つていた。

「そう言えば、彼のクラスに私達が行くことを言つてなかつたわね」

「あ！忘れてた…」

なお、結局晃は朝食に間に合う事が出来ず今日もカ〇リーメ〇トで済ませることになつた。

そして、朝のSHRになり、ロゼッタ先生が教室に入つて来た。

「ハ～イ席に座りなく今日はね、転校生を紹介するよ。ほら、入つてきな」

そう言つて、入つて来た人に晃は驚いた。それは、朝に会つた空と鏡花の2人だった。クラスの女子達は2人の容姿の凄さに圧巻されていた。

「それじゃあく自己紹介してもらおうかね」

「は、はい。天宮 空と言います。よろしくお願ひします」

「四条 鏡花つて言うわよ～よろしくね」 チュ

『キヤーーーーー！』

「鏡花お姉さま～私一生ついていきます！」

「私も～！」

あちらこちらで鏡花の魅力に取りつかれた子達は、歓喜の声を上げていた。

「ハ〜イ静かに。それじゃあ2人は坊やの隣に座りな。授業を始めるよ〜」

そう言つて、空は晃の前の席。鏡花は晃の隣の席に座つた。

「よろしくね〜晃〜」

「よろしくお願ひしますね。田島さん」

「よ、よろしくお願ひしますね。天宮さん。四条さん」

「あん！四条さんなんて堅苦しい言い方はやめて、鏡花つて呼んで」

「…よろしくお願ひしますね。鏡花さん」

「ええ、晃！」

「じゃあ、私の事も空でいいわよ」

「わかりました。空さん」

こうして、女神2人は晃に接触する事に成功したのである。

昼休み。早速晃と空、鏡花の3人で食堂に向かうのであった。その後には、あやめ、サーシャ、ターニヤの3人が居たが何故か柱の後ろに隠れている。

「怪しいよね…」

「そうですネ」

「ムグ〜」

あやめとサーシャは気になってついて来たが、ターニヤだけは完全に違っていた。あの2人が来てからずっと晃にべったりと張り付いて居る。

それを面白くないと思ったターニヤはむくれてた。

「ターニヤちゃんどうしたの？」

「べ、べつに…」

「もしかして、晃サンがあのだ2人に取られて気になっているとか？」

「なななな！／＼／＼」

そう言っているターニヤの顔は真つ赤になっていた。そして、あやめ達3人も食券を買って、晃達に混ざるのであった。

晃は空と鏡花の2人を連れて空いている席を探していた。そこに一夏達が現れた。箒と鈴、セシリアの他に見慣れない金髪の男性操縦者が居た。

「よう！晃。どうしたんだ？」

「…別に」

「なあ！聞いてくれよ。今日1組に転校生が入ったんだぜ！」

「それで？」

「2人なんだけどよ、その内の1人を紹介するぜ！こいつはシャルル・デヌノアって言うんだ」

そう言つて、金髪の男性操縦者もといシャルル・デュノアは握手を求めてきた。

「初めまして。シャルル・デュノアです。一応世間では3人目の男性操縦者つてなつて
いるかな?」

「田島晃です。3組のクラス代表をしています。よろしくお願いしますね」

そして、2人は握手をした。しかし、その時晃は違和感を感じた。

「!」

「?どうかしたかな?」

「いえ、別に…」

「そうですか?」

晃は3組に来た転校生の2人を紹介した。

「こちら3組に転校生して来た、天宮 空さんと四条 鏡花さん」

「初めまして、天宮 空です」

「ハア、イ! 四条 鏡花つて言うわ。よろしくね」

「篠ノ之箒つて言います」

「セシリア・オルコットですわ!」

「凰 鈴音よ! 鈴つて呼んでね!」

一夏以外の自己紹介が終わつたが、一夏は2人を前にして妙に緊張していた。

「お、織斑一夏って言います！一夏って呼んでください！」

その反応に鈴がジト目になる。箒とセシリアは（鈴（さん）も大変だな…）と思うのであった。

「よろしくね」

「は、はい！」

一夏の反応を見て晃は思った。あの唐変木の馬鹿がこの2人に惚れたのか？と…

しかし、2人は特に気にしていない。むしろ興味が無いと言った方がいい。そんな事も知らずに一夏は必死になっていた。

「あ、あの！何かあったら言ってくださいね！俺やりますから！」

「ええ…分かったわ」

そんな2人を見た晃は早く飯を食べようとする。だが、一夏もそれに参加すると言ってきた。

「さて、そろそろ食べないと時間がない。僕たちは向こうで食べるからそれじゃあ」

「あー待ってくれよ！せっかく転校生が来たんだ！偶には一緒に食べないか！」

「…お氣遣いいただきありがとうございます。ですが、貴方とは先ほどの知り合ったばかりです。またの機会にしませんか？」

「そうよ！私たちは晃と一緒に食べたいの」ギユ！

そう言つて、鏡花は豊満な肉体を晁の左腕に絡めて来た。それに負けじと空も右腕の腕に抱きついて来た。

「ちよつと2人共！」

「あらゝ晁はこれくらいで照れたりしないわよねゝ」

「う、うん！さて、晁さん。行きましようか」

「わかつたから、離れてくれ！」

そう言つて、晁を抱きかかえる様に2人は去つていた。それを見ていた一夏は何故か悔しがつていた。

「ちくしょう！何だよ、晁だけ……」

「付き合いきれん。私たちは別な場所で食べることにしよう。行こうかセシリア」

「ええ、そうですわね」

そんなやり取りを見ていた箒とセシリアは呆れて他の場所に行くのであつた。シャルルは苦笑いし、鈴は一夏に食つてかかつた。

そして、あやめ達はどうと……

「な、何だよあれー！」

「まあ、天宮さんも四条さんも大胆だね」

「あれが、『両手に花』つて言うことデスカ？アヤメ？」

「えっと……ちよつと違うかな？」

そんなやり取りを見ていた他の女子生徒達は「羨ましい……」と思っていたのが大半だった。

放課後。今日も楯無指導のもとIS訓練を終えた晃は、第3アリーナから出ようとしたら別のアリーナが騒がしことに気が付いた。

何かトラブルでも起きたと思い、騒ぎが起こっているアリーナに向かうのであった。そこには、1機の黒色ISが一夏達を襲うとしていたところだった。

流石にマズイと思った晃は自身のIS【Space Knight】を展開させて、一夏とそのISとの間に入り込んだ。

第7話 ドイツからの転校生とシャルルの秘密

晃は自身のIS〔Space Knight〕を展開させ一夏達の間に入った。それは、ラウラのIS〔シユバルツァー・レーゲン〕の弾丸が鈴に当たる寸前の出来事だった。

『晃（さん）！』

「全くどうしてこう厄介事に巻き込まれるんだ…」

「誰だ貴様は？」

「1年3組の代表田島 晃だ。君は？」

「フン！いいだろう。私はドイツ代表候補生のラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「そうか、君があの馬鹿が言っていた2人目の転校生だな」

「御託はいい！私は織斑一夏と戦うんだ！そこを退け！」

「…あの馬鹿と喧嘩するのはいいが、周りの人を巻き込むのは関心しないな」

「フツそれは奴らが弱いから悪い」

「どうしてそこまでアイツを目の敵にする」

「アイツは教官のモンドグロツソ大会2連覇を阻止したんだ！アイツさえいなければ…」

教官は……」

そんな事で八つ当たりされた織斑もそうだが、巻き込まれた人達もたまつたもんじやない。それなら……

「ボーデヴィツヒ。いい案がある」

「何だ？」

「来週末に行う学年別トーナメントで試合と行こうじゃないか。そこなら思う存分暴れるだろ」

「……いいだろう。今日の所は貴様に免じて引いてやる。だが忘れるな！次に会った時は全力でお前を叩き潰す！」

そう言つて、ラウラはISを解除してピットに戻つて行くのであつた。そして、晁も同じ用にISを解除してアリーナを去つていくのであつた。

そんな時、助けた鈴がお礼を言いに来た。

「あ、ありがとうね。助けてくれて……」

「まああそこで助けなかつたら後味が悪いからね。それより大丈夫かい？」

「ええ、平気よ」

「そつか……早く織斑の所に行つてやりなよ。アイツも心配しているだろうし」

「ええ、そうね」

鈴が一夏の所に向かうと今度は、慌ててあやめ達が駆け寄ってきた。如何やら先程の件で心配して来たようだ。

『晃（君）（サン）！』

「どうしたんですか？」

「どうしたじゃないよ！心配したんだからね！」

「そうですヨ。いきなり飛び出して行ったのデ…」

「バカ！アンタはそうやって無鉄砲なところを直しなさいよ！」

「…そうだったね。ごめん」

そう言つて、あやめ達を落ち着かせる為に今後は無茶しないと約束をした。その後口ゼツタに職員室に来るように言われたので行つてみる。

「いい事したね坊やあく。ただねく無茶は良くないよくただでさえ2人目の男性操縦者は目立つんだからねく」

「すみません。ただ、あそこで躊躇つていたら一生後悔すると思つたので」

「うんうん♪それならお姉さんは何も言わないよ。流石男の子だねえく」

「…お姉さんつて歳じゃあ「何か言つたかい？」いえ…何でもありません」

「とにかくだ。早く彼女達を安心させてあげな」

「彼女達？」

そうやって、晃は職員室のドアを見た。するとそこには、ドアの隙間からあやめ達と女神である空と鏡花が覗いていた。それを見た晃は苦笑いをするしかなかった。

「そうですね。彼女達為にも…」

「そうしなよ〜」

「ええ、それでは失礼します」

そして、職員室を出ようとした際彼女達は慌てて逃げて行くのであった。

その日の夜。自室で勉強していた晃の所に一夏が駆け込んできた。

ドンドン！ドンドン！

「は〜い？」

『俺だ！一夏だ！開けてくれ！』

「…」

『無視するな〜！』

はあくため息を出しつつもドアを開けると、勢い良く一夏が入って来た。そして、慌てて晃の腕を取って自室に向かって行った。

「晃！頼むついて来てくれ！」

「はあ？僕はこれから勉強しないといけないんだけど…」

「とにかく俺の部屋に来てくれ！早く！」

「…わかったよ」

そして、一夏の部屋に着くとジャージ姿のシャルルが居た。違う点と言えば胸元が少し…いや、結構膨らんだ。それを見た晃は…

「やつとバレたのか」

「え！やつとでどういう事だよ」

「…もしかして最初からバレていた？」

何故晃はシャルルが女の子だと思ったのか、順をおって説明をするのであった。

「最初は、君と握手した時に男にしては手が小さすぎると思ったんですよ。さらに言えば喉仏がないですし、決定的な事と言えばアリーナの更衣室で着替えようとした時ですよ。織斑がグイグイ絡んできたのに対して、羞恥心を出していた。あとはその見た目かな」

晃の決定的な言い方に項垂れてしまったシャルル。一夏はオロオロするだけでいた。そして、晃は何故男装をしてまでIS学園に来た理由を聞きだした。

「どうして、そこまでしてIS学園に来ようと思ったんですか？」

「…父の命令で仕方なくかな」

「でも、デュノア社ってISじゃあ有名な会社じゃないのか!？」

「…それは第二世代でのシェアは世界3位だがな。けど、今は第三世代が主流だ。それに彼女のいる欧州では次世代機選定計画イグニッションプランが進められている。それに乗り遅れまいと、フランスでも焦っているんだらう」

「…晃って結構博識なんだね。次世代機選定計画って僕も知らなかったのに」

「君の事について調べていてね。それに…デュノア社の内情についてもある程度調べが付いていたからね」

「そっか…」

「なあ晃教えてくれよ。そのデュノア社の内情って奴を!」

晃はシャルルを見て言っているのか迷ったが、シャルルの事を考えて言うことにした。

「…この子はな…愛人の子なんだ」

「な!」

「…そうだよ一夏。僕はね今の父アルベル・デュノアとの愛人に生まれた子なんだ」

そこからシャルルは今までの生い立ちを喋り始めた。本当の母親は身体が弱くシャルルが物心付く前に亡くなり、デュノア社に引き取られたこと。そこでのIS適性が高く、父アルベル・デュノアから『IS学園に侵入し、男性操縦者のデータ若しくは肉

体関係になりその遺伝子を取って来い』と命令されたことを…

それを聞いていた一夏は怒りをあらわにしていた。

「そんなのひどすぎる！確かに親が居なければ子供は生まれません。けどよ！親の言いなりになるなよ！」

「一夏？」

「俺にも親はいない…けど千冬姉が居れば俺はいいと思ってる」

「…」

その話しを聞いて晃は思った。自分は何て幸福な家庭に生まれてきたのかと。家に帰れば紫音と茜の2人が待っている。けどこの2人には親と言える存在がない。特に一夏に関しては、両親共いないとなっている。

そんな2人を見つつ晃は考えた。

「それでこれからどうする？」

「どうって…」

「念の為に言っておくが1人で解決しようと思わない方がいいよ。これは学生の僕達では対処しきれない問題だ」

「ぐ…」

「…ありがとうね2人共」

「シャルル？」

「…僕はこの話を公表するよ。そして、フランスに戻って良くて独房行きかな」

「シャルル…」

「…」

「…まあ2人もありがとうね。話してスッキリしたよ」

「それでいいの？」

「…僕にはもう生きていく資格はないよ」

「そうか…先に謝っておくよ。すまん。それと…歯を食いしばれ！」

「え？」

パーン

そう言つて、晁はシャルルの左頬を思いつきり引つ叩いた。突然の出来事で訳も分からないシャルルと一夏。そして、数秒経つてから一夏が食つてかかつてきた。

「オイ！何してるんだよ！女の子の顔を殴るなんて！」

「言つたはずだ。すまん」と

「だからって殴る必要ないだろう！相手は女の子何だぞ」

「それがどうした？じゃあお前は、女の子が銃を向けてきたら何もしないのか？」

「そ、それは…」

「それに、生きることを諦めている奴の顔を殴ったってこつちがいい気分じゃないんだ
…」

「なんだと！」

「一夏やめなよ！…晁の言う通りだよ。僕には生きる資格なんてないんだよ」

「シャルル…」

「本当にそう思っているのか？」

『え？』

「前に言ったはずだ。『念の為に言っておくが、一人で解決しようと思うなよ。これは学生
の僕達では対処しきれない問題だ』と」

「それって…」

「あとは自分で考えるんだね。それじゃあ僕は勉強する為に戻るから」

「うん…ありがとうね」

「…」

そう言つて、晁はシャルルと一夏の部屋を出て行つた。そして、一夏とシャルルは「今日
は遅いから早めに寝ようか」と言うことで寝ることにした。

晃は自室に戻ると、自身Space Knightのコア人格である「レイ」と思念通信を始めた。

レイ、いる？

（はい。マスター）

デュノア社の内情ありがとう。おかげでシャルルとも話せたよ。

（いえいえ、私はマスターの為に動いただけですから）

そこでもう一つお願いがあるんだ

（はい。シャルルさんを助ける方法ですよ）

：君には驚いたね。その通りだ。今のところIS学園の特記事項には『本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする。』がある。

（なるほど）

だけど、これは3年間しか使えない。それに、フランス政府を還してデュノア社がシャルルを強制的に本国に召還されたら、チエックメイトだ

（ええ、ですからその前に助けないといけないですね）

そうなんだよねー思いつ切って織斑先生に相談するかな

（ブリュンヒルデ織斑先生なら良い解決策を出してくれるでしょう。しかし…）

それには、シャルルの正体をバラす必要があるか…

(ええ、それも織斑一夏にバレずに…)

…

晃は少しだけ考えた。そして「レイ」にある指示を出した。

レイ。シャルルのIS【ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡ】につなげる事は出来るかい？

(少々お待ちください…可能です)

ありがとうございます。繋いでくれる

(わかりました。ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡとのリンクを開始します)

数秒の機械音の後に晃はラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡのコア人格と対話を始めた。

初めまして、僕は田島晃と言います。ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡのコア人格で問題かな？

(うん。そうだよ！)

良かった。さつきは君のご主人様を叩いたりしてごめんね

（大丈夫。もしあなたがしなかったら、私が彼女とのリンクを切っているかもしれないから）

ならいいけど…それで本題だけど、君のご主人は今危険な状態になっている

（知っているよ。けどこればかりは本人の問題だからね。声が出せない私にはどうしようもないんだよ…）

その事について僕に任せてくれないかな？

（…いいの？）

ああ、悪いようにはしない。約束する。

（……わかった。お願いシャルルを…いえシャルロットを助けてあげて！）

わかった。それじゃあ「レイ」に戻ってくれるかい

（うん！）

そして、数秒の機械音の後に晃は「レイ」とこれからの事について対策を始めた。

さて、向こう側とも合意が得られたから、明日朝一で織斑先生に相談してくるよ

（了解ですマスター。それまでに最善の策を考えておきます）

頼むよ

そう言つて、「レイ」との思念通信を終えた、晃は自身の勉強を始めるのであった。時

刻は午後1時

ジリリリリリ。

部屋にある目覚まし時計がなり始めた。時刻は午前5時。あの後勉強していたが、10分の仮眠のつもりがガツツリ寝てしまった。

その証拠に机に突っ伏して顔にペン痣が残っている。そんな事を考えている暇もなく、今日もトレーニングを開始するのであった。

トレーニングが終わって自室に戻り、シャワーを浴びる。ちよつと力こぶを作るがあんまり変わらないようだ。IS制服に着替えて食堂に向かう途中シャルルと一夏に会った。

「よう！晃！」

「おはよう晃」

「おはようシャルル。織斑」

「いや、昨日は悪かったな。いきなり突っかかってよ」

「…別に、誰にでもあるだろう。それよりも早く食堂に行こう。でないと「晃く！」ぐえ」晃が食堂に行こうとした時後ろから来た鏡花に抱きつかれて、思わず変な声が出てしまった。

「晃く会いたかったわよ」

「…鏡花さん。ちよつと退いてもらえますか?」

「つれないこと言わないでよ。私達の中でしよくそれに、空ももう少しで来るわよ。一緒に食べましょうよ」 ムギユ

「わ、わかつたから少しだけ離れてくれ!」

そう言つて、豊満な肉体で惜しげもなく抱きしめてくる。流石にまずいと思つた晃は諦めて空と一緒に食べる事にした。

その姿を見て一夏は悔しがり、シャルルは苦笑いするのであった。

午後の授業が終わり、中庭で休息を取っていた晃は教室に戻る途中、ラウラ・ボーデヴィツヒと千冬の会話を偶然聞いてしまった。

「教官なぜこんな極東の地で教鞭を取っているんですか!」

「何度も言わせるな。私には私の役目がある。それだけだ」

「お願いです教官! 我がドイツで再びご指導を! ここでは貴方の能力は半分も活かされておりません」

「ほう…」

「大体この学園の生徒達は意識が甘く、危機感がない。それにISをファクションか何かと勘違いしている。その様な輩に教官が教える必要はありません」

「そこまでにしとけよ小娘が…少し見ない間に偉くなつたな。15歳で選ばれた人間の気取りとは恐れ入る」

「きよ、教官…」

「もうそろそろで授業が始まるぞ」

「つく」

そう言つて、ラウラは教室に向かつて行くのであつた。晁も去ろうとしたら、千冬に見つかつてしまった。

「その男子、盗み聞きか？異常性癖は感心せんぞ」

「…偶々ですよ。決して他意はありません」

「本当か？ならいいが…さっきの話は他言無用で頼む。特に一夏にはな…」

「わかりました。それと話は変わりますが、1つお願いがあります」

「何だ？」

「今夜時間空いていますか？相談したい事があるので」

「今夜か…確か大丈夫なはずだ。寮監室でいいか？」

「はい。そこで大丈夫です」

「わかった。なら、時間を作っておく」

「ありがとうございます。それじゃあまた」

そう言って、晃は自身の教室に戻るのであった。教室に着くなりあやめ達に『どこ行っていたの!』と怒られたのは言うまでもない…

第8話 シヤルル救出作戦

シヤルルの件で相談をしにきた晃はその日の夜、寮監室に赴いた。

「夜分遅くに失礼いたします。田島 晃です」

『た、田島か！少し待ってくれ！』

「はあ、いいですけど…」

そう言つて、10分程待つたが、その間部屋の中からは物をひっくり返すほどの大きな音が聞こえてきた。

ドガーーン

何かあつたと思ひ晃はドアを開けると、部屋の中はゴミ屋敷と言つていいほど散らかつていた。

「織斑先生!?大丈夫ですか？」

『だ、大丈夫だ！気にしないでくれ！』

「しかし…すみません。失礼します」

『あ、田島!』

「織斑先生!…つてなんですかこの部屋は?」

「あうう／＼／＼」

部屋へと通じる廊下には、酒瓶や缶ビールが転がっており台所にはつまみがそのまま放置している。更に、服は干しっぱなしでしわくちゃになっている。辛うじて、下着は無かったが、よく見ると押入れに赤色の布が見えている。

これを見た晃は相談する前に先ずは、ここをどうにかする事を選んだ。

「ち、違うんだ!田島!」

「何が違うんですか?」

「それは…その…そう!最近忙しくてなあろくに飯や家事が出来てなくてな…それに仕事_事が溜まってしまつて…その…」

「はあ…わかりました。それじゃあ僕は台所と廊下を掃除するので織斑先生は部屋の中を掃除してください」

「…怒らないのか?」

「別にいいです。その代わり僕のOKが出るまで何度でもやり直させますかね」

「は、はい…」

こうして、千冬の部屋寮監室の片付けが始まった。普段から読書している分要領を得ているため

テキパキと掃除していった。一方の千冬も晁からNGを貰うまいと必死になって掃除をしていくのであった。途中下着を見られてしまうハプニングがあつたがそこは朴念仁の晁。全くの興味なしといわんばかりの冷静沈着で進めていく。

そして、2時間かけてようやくOKが出たので本題に入る事が出来た。

「すまんな田島。部屋の掃除を手伝つて貰つただけではなく料理してもらつとは……」
「別にいいですよ。こちらこそ貴重なお時間を頂いたので……それで相談したいことですが」

そこからは、デュノアが女子であること。デュノア社が経営難に陥っていること。更には一夏が自分で解決しようとしていることを全て話し出した。それを聞いた千冬はまたしても、頭を抱えてしまった。

「……以上が相談の内容です」

「そうか……一夏の奴どうして私に話してくれなかつたんだ」

「恐らくですけど織斑は、自分一人で解決して“シャルルを守つた”と言う箔が欲しいんでしょ」

「事の重大さに気がつかなかつたのか……わかつた。すまなかつたな田島」

そう言つて、千冬は頭を下げてきた。それを晁は必死になって止めた。

「やめてください。貴女が頭を下げる必要なんてありませんよ」

「いや、アイツの心配事を察してやれなかった。それに昼間のボーデヴィツヒの件だったそう。あんな風に育てた覚えはなかったのにな」

「それじゃあ、ボーデヴィツヒさんはかつての教え子だったんですか？」

「ああ、実はな……」

そこからは千冬の過去の話しだった。モンドグロツソ2連覇がかかった大事な試合の前に一夏が何者かに誘拐された。誘拐犯の要求は『モンドグロツソの棄権』だった。犯人側の要求を飲むため、千冬はモンドグロツソ決勝戦を棄権した。そして、ドイツ軍の協力の下一夏を救出する事に成功した。その見返りとして、1年間ドイツにてISの教鞭を取った。

その時居たのがラウラだった。

「……という事があってな。だからボーデヴィツヒはかつての教え子だったんだ」

「教え子というよりも、熱狂的な信者の様な感覚に見えましたがね」

「ああ、力を求める余りあんな感情しか持ち合わせていなくてな……本題に戻ろう」

「ええ、僕が考えた計画は2つです」

晃の考え方はこうだ。まず、晃のIS【Space Knight】のコア人格に依頼し、デュノア社のネットワークにハッキングする。そこでデュノア社社長のアルバー・デュノアとコンタクトを取る。

次に、アルベール・デュノアを元凶であるシャノワール・デュノアと引き離してデュノア社から亡命させ、IS学園の技術統括責任者としてトップで迎え入れる。

最後にデュノア社の不正を全世界に知らせ、デュノア社を倒産させる。

「と言うプランがあるんですが、いかがでしょうか？」

「うむ、いい考えだ。だが、問題点がある」

「ええ、亡命に成功したとしたらシャルルは二度とフランスの地を踏めないでしょう」

「ああ、それにフランス政府がIS委員会に難癖をつけてデュノアを強制送還させるかもしれない」

「そうですね……」

「うむむ……どうしたものか」

そんな風に悩んでいると1本の電話が鼻にかかってきた。知らない番号だったが出てみる事にした。

「もしもし？」

『ハロハロ〜！アッキー元気だった？』

「その声……東さんですか？」

『ピンポン！ピンポン！ピンポン！大く正しく解！大天災の東さんだよ！』

「た、東だと！田島スピーカーモードにしてくれ！」

「わかりました」

『あれ？その声はもしかしてちーちゃん？』

「そうだ。このバカ兎め。田島にまで迷惑をかけおつて」

『まあまあいいじゃん！それよりも、アッキーはその子を救いたいのか？』

「僕は…ただ生きることには絶望している子を野放しにしておくのは嫌なので…」

「田島…」

『ふ〜んまあアッキーがする事に東さんは賛成だけどね。それで段取りだけど、基本的にアッキーの作戦を主軸としてイレギュラーが起こつたら、東さんがフォローするよ』

「ありがとうございます。東さん」

「東。今回の件だが公になるとIS学園側としても困る。そうならないように、細心の注意を払って行うぞ」

『ラジャー！それじゃあまたね〜』

そう言つて、東は電話を切った。晃も作戦決行日を明後日として寮監室を後にした。

そして、作戦決行日。幸いにも学園は休みで、ほとんどの生徒達がIS学園を離れている中晃は第三アリーナのピットにいた。

その中には、千冬、ロゼッタ、シャルルそして、ターニヤの姿があつた。千冬は万が

一の事を考えてターニヤを護衛として付けたのだ。

「それじゃあ織斑先生行つてきます」

「うむ。無事で帰つて来るんだぞ」

「晁…ごめんね。僕の事で…」

「気にするなつて言うのは無理があるから、僕が戻るまで織斑のこと頼んだよ」

「…わかつたよ」

「無事で帰つて来るんだよ坊や」

「それじゃあ、行つてきます。行くよレイ」

（了解です。マスター）

そう言つて、晁とターニヤはIS〔Space Knight〕と〔ウルバリン〕を纏つた。そして、ピットから飛び出して行つた。

目指すはフランスのデュノア社本社である。なお、東が事前にフランス政府に圧力をかけて2人がフランスに行く事は事前に伝えてある。

そして、ISを使い1時間弱でフランスはデュノア社にたどり着いた。受付にアルベール・デュノアとの面会を要求した晁は早速彼との面会を果たしたのだった。

「失礼します。社長、IS学園からのお客様です」

「入ってもらえ」

「失礼します。IS学園の田島 晃です。彼女はジャマイカ代表候補生のターニャ・アジャイルさんです」

「初めまして、ジャマイカ代表候補生のターニャ・アジャイルです」

「こちらこそ、デュノア社長。アルベール・デュノアだ」

「早速ですがデュノア社長。少しだけPCをお借りしても宜しいでしょうか？」

「ああ、構わないが……」

「失礼します」

そう言って、晃はアルベールのPCからある人物へ連絡した。その先に居たのは、シャルルと千冬がいた。

『…お父さん』

「…シャルル。それにブリュンヒルデも居るといことは」

「ええ、既にシャルルさんが女性である事はバレています」

「なんだと！」

「ご安心ください。この件を知っているのは極一部の人間です。ですが、事を大事にしなくありませんので、早速本題に移ります」

「本題だと？」

「ええ、単刀直入に申し上げます。アルベール社長、日本に亡命いたしませんか？」

「なんだと？会社を捨てろと言うのか！」

「違います。今回の件、妻のシャノワール・デュノアさんが仕組んだ事は明白ですが、貴方は事前に察知してシャルルをＩＳ学園へ避難させた」

「…」

「目的は後妻であるシャノワールさんからシャルルを守りたかった。違いますか？」

『お父さん…』

「…そうだ。彼女は会社の利益だけを考えて行動していた。そして、私とジャンヌとの間に生まれたシャルルを毛嫌いしていた」

『…』

「だが、彼女にＩＳ適性があると知ると目の色を変えて来た。そして、シャルルに男装させる人目の男性操縦者と偽り、広告塔として使いだしたのだ」

「…」

「だから、私は国際情勢が一切干渉しないＩＳ学園へとシャルルを避難させたんだ…すまなかつた」

『お父さん…ありがとう』

それを聞いたシャルルは涙を流していた。自分は捨てられたんじゃない…父親から疎まれていたんじゃない。むしろ大事にされていたと…

「それで、アルベールさん。これは先程の提案に追加ですが、亡命先は「IS学園技術顧問」と「株式会社スペースノイドの社長」になります」

「ちよつと待つて、「IS学園技術顧問」は分かるが、なぜ「株式会社スペースノイド」と言う会社社長になるんだ？」

「それには、この人から説明してもらいましょう」

そう言つて、再びPCを操作させてある人物とコンタクトを取つた。その人物こそ世界中が血眼になつて探している大天災篠ノ之束本人だつた。

『ハロハロ〜！大天災の束さんだよ〜』

「た、束博士！どうしてここに！」

『どうしてつて？アッキーに協力しているんだよ。凡人の君でもわかるだろ』

「は、はあ…」

『さつき話したことだけど「株式会社スペースノイド」はアッキーと私の夢でもあるISを宇宙で使う為の第一歩なんだよ。その為に凡人の技術を使いたいつて言つてんだよ』

「そういうことです。力を貸して頂けないでしょうか？」

「…魅力的な話したが、私一人ではどうにもできない」

「そこで、まだシャノワール・デュノアの息がかかっていない社員を引き抜いて欲しいのです。そこから会社を設立しアルベールさんに社長を行ってほしいのです」

『お父さん、お願いします！晁の力になって！』

「シャルル…わかりました。このアルベール・デュノアの力をお貸し致しましょう」

そう言つて、晁とアルベールは握手をした。

とりあえず、アルベールには社員の確保を行つてもらふ為一旦別れて晁とターニャはフランスを後にするのであった。

晁とターニャが帰つた後のＩＳ学園。千冬とシャルルは安堵した顔をしていた。

「ふうく何とかなつたな。それにしても田島には驚かされる」

「そうですよね。あの交渉力には驚いています」

「本当に一夏や篠ノ之と同じ年かと思うと怪しくなってくる。こういう所を学んで欲しいものだ」

「ただ、これで全部が解決したわけではない」

「え？」

「日本に亡命するとなると、故郷のフランスに戻れるかどうかわからんからな」

「ええ！それはちよつと…」

「まあその事も考慮して田島に任せてある。今は田島を信じようではないか」
「わかりました」

そう言って、シャルルと千冬は部屋を後にするのであった。